ノミネート入賞

作品番号：2

宙庭 - 自然と宇宙をつなぐ建築

愛知工業大学　工学部　建築学科　4 年
飯田　　翼
磯部　隆太郎

「宙庭」は、日常の中で宇宙とのつながりを感じるための建築である。円環状の空間と中央の水庭によって空を切り取り、太陽や月、星の光、季節の移ろいを建築へと導く。光や風、雨など地球を巡る自然現象を通して、遠い存在である宇宙を身近な体験へと変え、人と自然、そして宇宙との関係を再認識する場を提案する。

そらにわ

宙庭

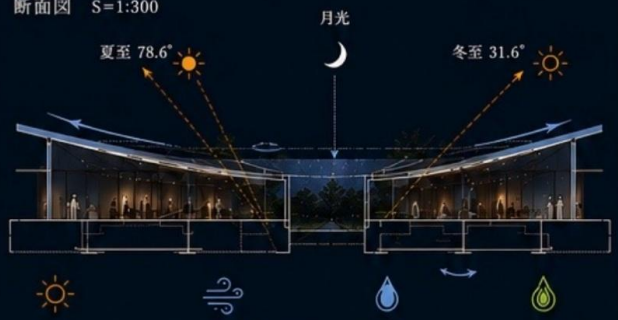
― 自然と宇宙をつなぐ建築 ―



人は昔、風や太陽、月の満ち欠けから
季節を知り、生活していた。
しかし現代では、情報はスクリーンから
得ることが多く、自然や宇宙を直接
感じる機会は減っている。

この建築は、自然と宇宙を感じる
装置である。
中央の庭は空を映し、風や光、雨や音、
星や月を五感で感じることができる。
建築そのものが、自然や宇宙と交信し、
人々の感覚を呼び覚ます。

断面図　S=1:300



自然採光
トップライトから柔らかな
自然光を取り込む

自然換気（煙突効果）
風の力を利用し、
自然換気を促す

雨水利用
雨水を貯留し、トイレ・散水・
水盤の補給に利用

地中熱利用
地中熱を活用し、
冷暖房・予熱に利用

環境システムダイアグラム



太陽光発電
屋根面に設置したPVで
自然の光を電気に変換

蓄電・制御
蓄電池に貯め、AIが
最適に制御

自然換気・排熱
風の流れ・煙突効果で
自然換気・排熱

AI環境制御
CO_2・温湿度・日射・照明・
人感など、各種センサーで
最適制御

雨水集水
屋根に降った雨を
雨水タンクへ集水

雨水利用
トイレ・散水・散水・
水盤補給に利用

地中熱利用
地中熱で空調を補助し、
省エネルギーを実現

パース・内観


星の宙庭

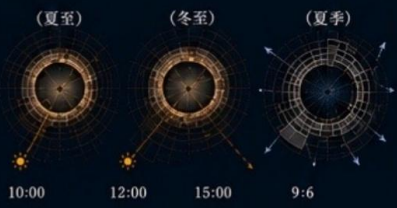

夕暮れの月見テラス


学習・展示エリア


夜の星空ホール


宿泊室（夜）

光のダイアグラム



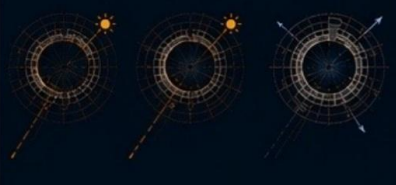
内観・開口部詳細　S=1:30



外壁：押出成形セメント板 t=18
断熱材：高性能グラスウール t=100
構造材：集成材 120×240
内装材：左官仕上塗り壁　t=15
床仕上：モルタルフローリング t=15

トップライト：Low-E複層ガラス
遮光ルーバー：アルミ可動ルーバー
天井：杉板張り t=15

ダイアグラム



内観パース

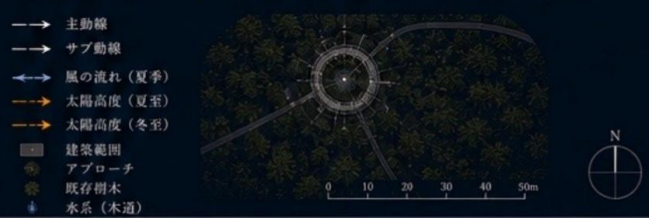

星空ホール（夜）
水面に映る星を眺め、静かに
宇宙を感じる大空間。


学びの場（展示エリア）
自然や宇宙の仕組みを体験的に
学ぶ展示空間。


宿泊室（夜）
窓と木を感じながら、月明かりの
もとで静かに休む。

SUMMARY（200字概要）

「宙庭」は、自然と宇宙とのつながりを建築によって取り戻すことを目的とした環境学習・滞在施設である。太陽光発電、自然換気、地中熱利用、雨水利用などの環境設備とAI制御を組み合わせ、建築そのものが自然と呼吸する存在となる。中央の水盤は空と月、星を映し出し、人々が自然や宇宙を五感で感じられる空間を創出する。建築を通して自然との新しい関係性を提案する。



ノミネート入賞

作品番号：3

水をすくう

神戸大学　工学研究科　建築学専攻　修士 1 年
小野綾音
河合友理子
槌谷結

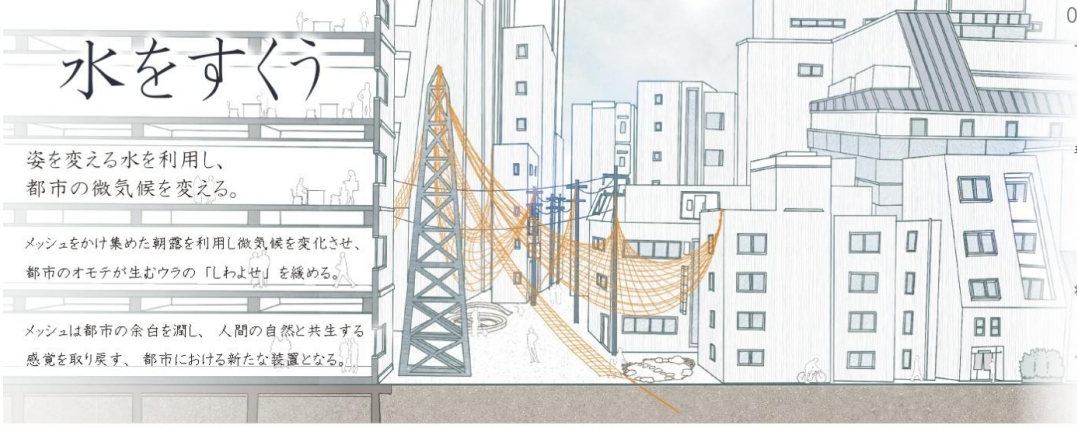
姿を変える水を利用し都市の微気候を変える建築を作る。都市の表空間の快適さは、ときに裏路地に居心地の悪い空間を生む。繊細なメッシュを裏路地にかけ、集めた朝露を利用し微気候を変化させることで、この都市の「しわよせ」を解決する。風と温度の分析によって架けられたメッシュは都市空間の余白を潤し、人間の自然と共生する感覚を取り戻す都市における新たな装置となる。

水をすくう

姿を変える水を利用し、
都市の微気候を変える。

メッシュをかけ集めた朝露を利用し微気候を変化させ、
都市のオモテが生むウラの「しわよせ」を緩める。

メッシュは都市の余白を潤し、人間の自然と共生する
感覚を取り戻す、都市における新たな装置となる。



01. 提案　都市空間にメッシュをかける

昔



かつては打ち水や井戸など、水を介して内と外が繋がっていた。表裏がなく都市は水と一続きだった。

現在



ビルが窗集し内部を快適にするほど、熱と湿気と排水は外へ出される。しわよせは裏路地に積もる。

将来



メッシュを架け、都市の微気候を変化させる。
人間の自然と共生する感覚を取り戻し、
再び宇宙を見上げる日が訪れる。

02. 敷地





室外機から出るドレン水



家庭からの排水



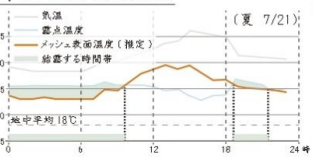
熱がこもる夏の裏路地

雑居ビルが密集する三宮駅北には、幅5mほどの裏路地がまちを縫うように走る。表通りが整い、ビルの内部が快適になるほど、行き場の無い「熱・湿気・水」は裏路地へ押し出される。

03. 分析　対象：神戸市三宮 駅北側裏路地

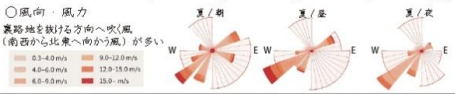
○露点温度と結露

メッシュ表面温度が露点温度を下回ると結露は発生する。夏と初秋は結露が見られるが、春と冬はほとんど凝縮しない。

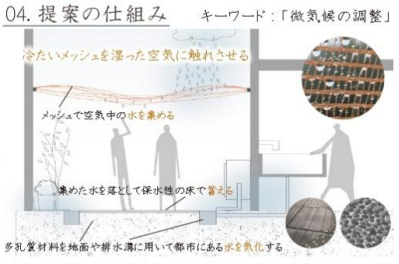


○風向・風力

裏路地を抜ける方向へ吹く風（南西から北東へ向かう風）が多い



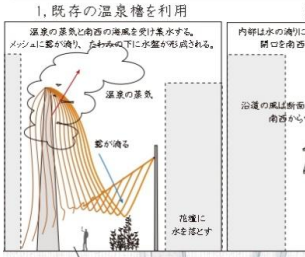
04. 提案の仕組み　キーワード：「微気候の調整」



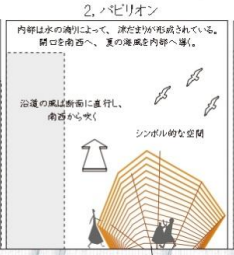
05. 手法　：環境が決めるメッシュの場所と形

風向・日影・気温・湿度・露点温度の分析を基に室外機・電柱・檜の位置を加味して決定

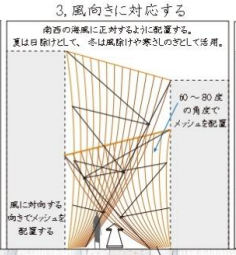
1, 既存の温泉檜を利用



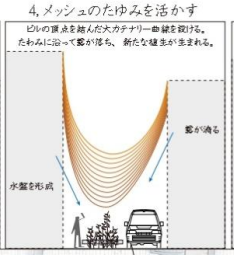
2, パビリオン



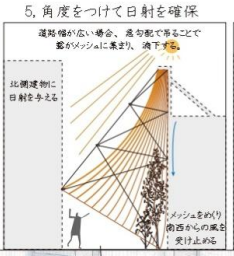
3, 風向きに対応する



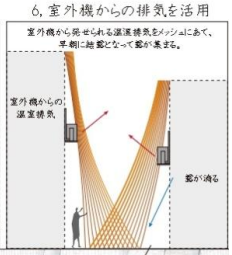
4, メッシュのたゆみを活かす

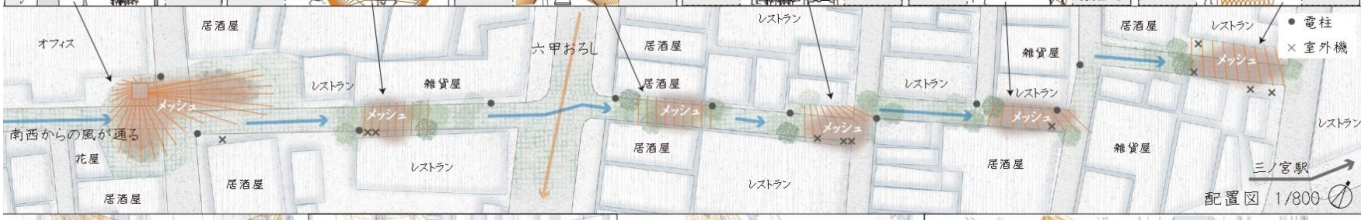


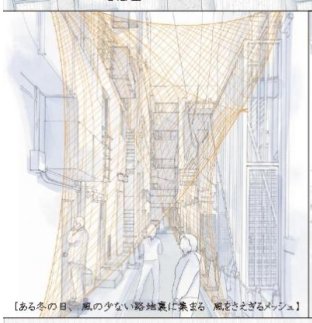
5, 角度をつけて日射を確保



6, 室外機からの排気を活用



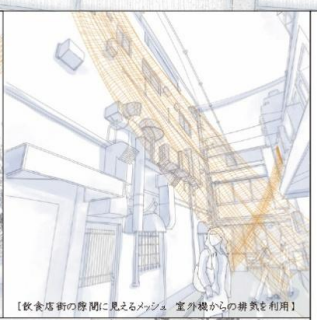




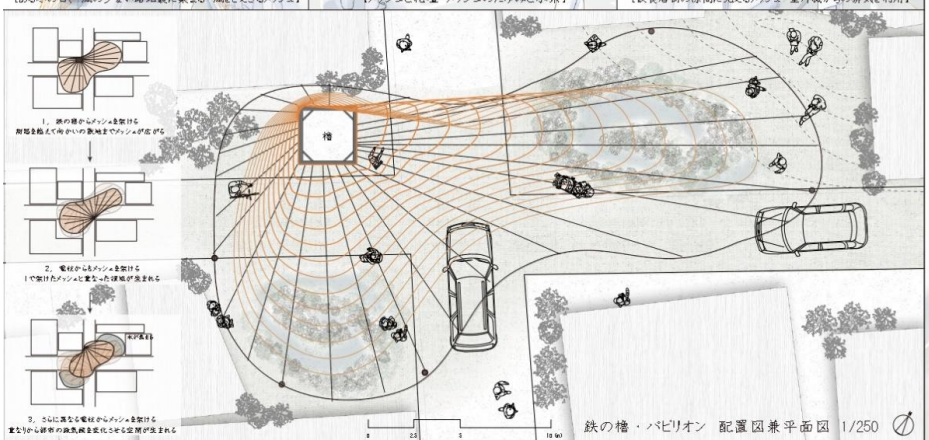
【ある冬の日、風の少ない路地裏に集まる、風をさえぎるメッシュ】



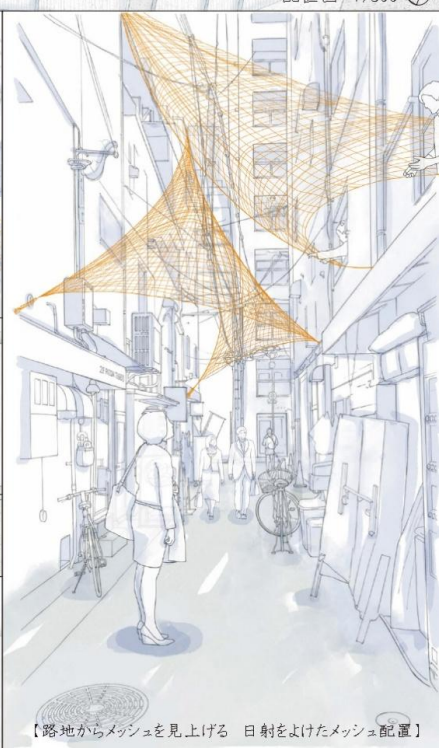
【メッシュと花壇 メッシュのたゆみと水系】



【飲食店街の隙間に見えるメッシュ 室外機からの排気を利用】



鉄の檜・パビリオン　配置図兼平面図 1/250



【路地からメッシュを見上げる　日射をよけたメッシュ配置】

ノミネート入賞

作品番号：6

Soil＆Orbit
職と景を耕すグラウンドポート

北海道大学　工学部　環境社会工学科　建築都市コース 4 年
岩井　洸樹

大地を読む身体、宇宙から大地を読むデータ。

農業・酪農と宇宙産業が共存する大樹町に、雪・家畜・水・熱・情報を循環させるグランドポートを提案する。

自然の変化を身体で感じながら、衛星・GIS・センサーで同じ大地を読み返し、現場知と観測データを重ねる。

自然との身体的な交信と宇宙との情報的な交信を建築の中で結び、季節を超えて地域資源と人の知をめぐらせ、新たな風景と営みを耕す場をつくる。

Soil & Orbit
—職と景を耕すグラウンドポート—



大地を身体で感じ、宇宙からデータで読み返す。
農業・酪農と宇宙産業が重なる大樹町で、雪・家畜資源・水・熱・情報を季節の循環へ編み直す。
自然の変化と人の営み、現場知と観測データを重ねながら、異なる職と知が同じ大地を共有し、新たな風景を耕すグラウンドポートを提案する。

01.背景 —近接する産業、分断された資源と営み—



農業・酪農と宇宙産業が近接する大樹町。
しかし、人・技術・資源はそれぞれ個別に動いている。
ふたつの産業を雪、家畜資源、水、熱といった
地域資源を介して結び直すことはできないか。

02.敷地 —産業をつなぐ第一ノード—



一次産業と宇宙産業が近接し、地域資源・物流・
実証フィールドを同時に受け止められる場所を選定する。
ふたつの産業をつなぐ起点となる敷地である。

03.提案 —資源・技術・人が巡るグラウンドポート—

職と景を耕すグラウンドポート



グラウンドポートは、宇宙産業に関わる研究者・技術者・企業人材を中・長期滞在者として受け入れ、
地域の農業・酪農と接続する第一ノードである。
働くことと滞在することを同じ大地に重ね、新しい産業を地域との継続的な関係へ育てる受け皿である。

建築形式



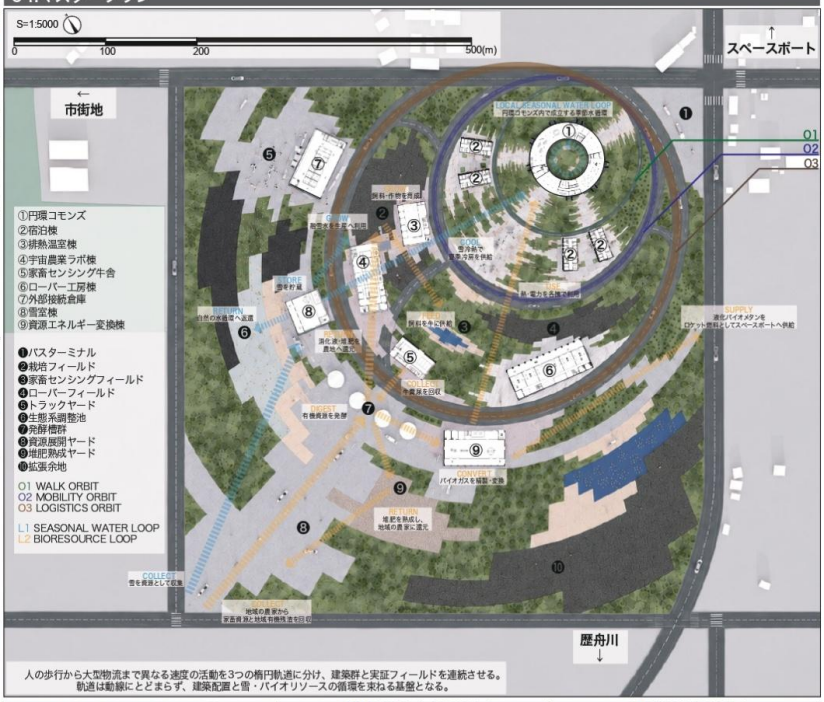
大きな屋根と単純な架構が、
大樹町の生産風景を形づくってきた。

一次産業の「ストック」と宇宙産業の「ロジスティクス」。
両者に共通する、物・機械・作業を受け止める建築類型が「倉庫」。

ふたつの循環



04.マスタープラン

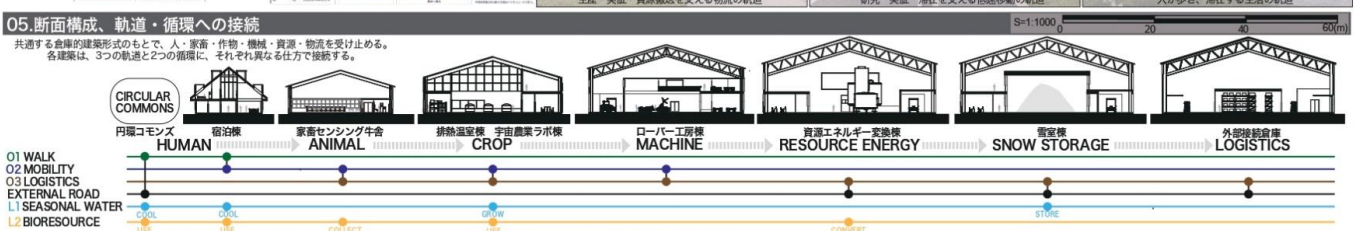


人の歩行から大型物流まで異なる速度の活動を3つの楕円軌道に分け、建築群と実証フィールドを連続させる。
軌道は動線にとどまらず、建築配置と雪・バイオリソースの循環を束ねる基盤となる。



05.断面構成、軌道・循環への接続

共通する倉庫の建築形式のもとで、人・家畜・作物・機械・資源・物流を受け止める。
各建築は、3つの軌道と2つの循環に、それぞれ異なる仕方で接続する。



06.ピクセルランドスケープ —衛星が読む単位を、地表をつくる単位へ—

衛星・センサーが読む地表情報を、人・動物・作物・機械・資源のスケールへ翻訳する。
ピクセルランドスケープは固定された地表ではなく、季節と活動に応じて使われ方を変える。



3つのピクセルスケール

	FINE PIXEL	FIELD PIXEL	GROUND PIXEL
ACTOR	人	牛 | 作物 | ローバー	物流 | 資源 | 水 | 生態
ACTION	歩く | 座る | 滞在する	放牧 | 栽培 | 走行 | 計測	輸送 | 熟成 | 貯留 | 生息
MATERIAL	芝 | 舗装 | 植栽 | 水盤	牧草 | 土 | 水 | 栽培床	舗装 | 雪 | 堆肥 | 湿地
	細かなピクセルが、歩行・着座・植栽を受け止め、身体スケールの外部空間をつくる。	中程度のピクセルが、飼育・栽培・ローバーなど複数の実証条件を分節する。	粗いピクセルが、資源処理・水循環・生態といった大地のスケールを受け止める。

07.円環コモンズ —大地を読み、季節を受け止める共有の中心—

農家・研究者・滞在者が、フィールドから集まるデータと現場知を共有するグラウンドポートの中心。
外周に軌道へ開く、円環の大屋根は大地や空への視線をつなぎ、冬には雪を受け止め、その冷熱を夏の環境へつなぐ。





ノミネート入賞

作品番号：8

生態のしきい、万燈のしきい

愛知工業大学 建築学部 建築学科 4 年
前田　裕夢

縄文の人々は空を読み、天と交信することで命を繋いだ。刈谷の万燈祭は雨乞いの祭礼であり、洲原池は天の恵みを蓄える器だった。しかし都市化とともに、池と人の距離は静かに遠のいている。失われた身体と宇宙の直接の交信を、建築として立ち現す。太陽の運行を室内に刻み、池面に映る夜の光が天への祈りを蘇らせる。洲原池のしきいに立つとき、身体はふたたび宇宙と会話を始める。

生態のしきい、万燈のしきい



4つのしきいのスキーム

01 水平のしきい

池と陸、自然と都市を
ゆるやかにつなぐ水平の通路。
生態系コリドーとしての
建築の基盤となる。



02 宇宙を覗く筒

屋根の筒は、空へと視線を導く。
光・風・雨・星を受け取り、
宇宙と対話する「覗き穴」となる。



03 池に浮かぶ万燈

夜、竹ルーバー越しの灯りが
池面に揺らぎ、万燈祭の光を想起させる。
水上に浮かぶ現代の万燈となる。



04 大地に還る天窓

屋根の天窓は光を地上へ導き、
植物や学びの場を照らす。
光は大地に還り、循環を生む。



内観パース







－コンセプト－

縄文の人々は空を読み、季節を知り、命を繋いだ。現代の刈谷で、池面に映る空と風の流れが、ふたたび身体と宇宙を結ぶ。

計画敷地



（https://www.google.co.jp/maps/?q）

情報が溢れる現代において、我々はいつのまにか、身体で空を読む力を失いつつある。刈谷市北部、洲原池のほとりに立つとき、池面に映る月と、竹の間を抜ける風と、屋根の植生を揺らす季節の気配が、それを思い出させてくれる。
夜の池面は月と万燈の灯りを揺らす。
建築は、人間と宇宙の交信装置になる。





ノミネート入賞

作品番号：9

鵜と鶚

西日本工業大学 デザイン学部 建築学科 ３年
西村勇雅

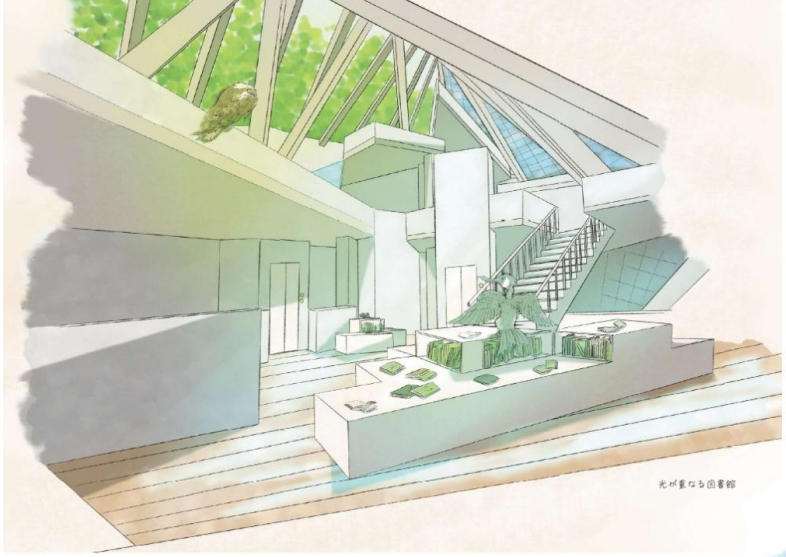
ウミウとミサゴ。

地球の７０％を占める海と、宇宙に最も近い空が重なる瞬間を、２種の鳥に例えて建築空間で再現しようと試みる提案になります。

２種の鳥は、海などに生息し、魚が主食な共通点がある一方、狩りに関しては、ウミウは潜水するのに対して、ミサゴは空から水中に飛び込みます。全く違う２種は、一瞬だけ同じ海面に存在します。

そんな、海面で起こる海中と空の重なりを、太陽光を利用して建築空間で作り出します。

鵜と鷺


光が重なる図書館

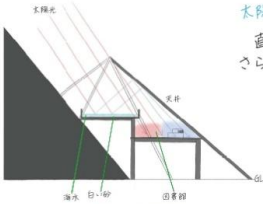
柏島に写る、日本屈指の透明度を誇る海を前にした、柏島山を斜めに上がる展望台と、その道中にある無人図書館が主な建築。

山に沿うように段々と建てられた7階の床と、それに比例して上がっていく海水面で構成された空間に、それを覆った三角トラスで構成されている。

コンセプトはウミウとミサゴ。
空中から一気に海に降下するミサゴと、
海に潜水し丸呑みして上昇するウミウを、
海面の間に広がる空と海中に例え
それを体感できる空間が
図書館に広がる。


段々と上がる床


展望台



太陽と海水と反射

直射する太陽光が照らす空間と、海水面に反射した青い光が、さらに天井に反射してできる空間が重なる。

海水面を図書館よりも上に配置し、水面全体で太陽光を反射させる。天井面は白く反射させやすい材質で、図書館の床面まで光を届ける。天井面は角度に変化をつけさせてより広く光を広げる。



海水と光

海水の中では、赤や橙などの光は吸収されて弱くなるに対して、青い光は吸収されにくく残る。また、海底に光を反射しやすい白い砂を敷くことによって、反射された光が再び水を通ることで、青い光だけが残り、建物内に広がる。



鳥の巣

ウミウとミサゴの巣をイメージした床の配置。
ウミウは、海岸の断崖・岩棚に巣を作る。
→段々に床を壁沿いに配置し、これを再現。
ミサゴは、海沿いの高木などに巣を作る。
→山々の木と同等か高い位置に床を配置し再現。



オブジェクト

本の配置をする場所を、腰掛ける場所に統一化。
腰掛ける場所ごとにジャンルをまとめる。
また、置きっぱなしに本を配置することで、鳥の巣をイメージ。自身の住処の感覚で本を楽しむ。



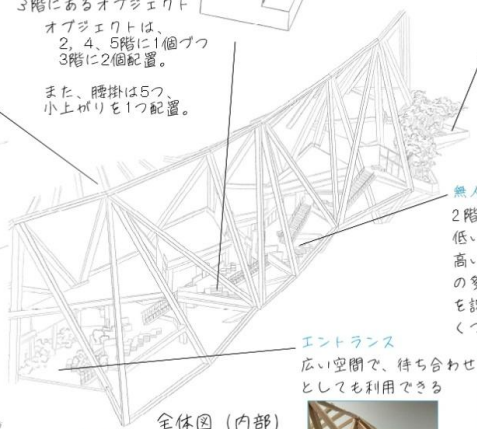
8層に分かれた水面。
上から下に水が流れる。
±2.5mずつの段差


水面北側
山を逆らうように
梁を配置し、
間をガラスで張る


平面図（海水面）

3階にあるオブジェクト
オブジェクトは、
2、4、5階に1個づつ
3階に2個配置。

また、腰掛は5つ、
小上がりを1つ配置。



展望台

GL　6階＋12.5m　7階＋15m
北に豊後水道と黒潮を望むことができる。木陰と海風、そして後ろの水面によって猛暑日の多い高知でも涼しく過ごすことができる。



平面図（有効スペース）

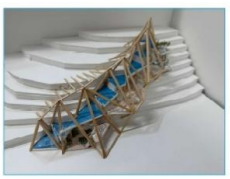
無人図書館

2階から5階に配置する無人の図書館。低い階層には子供向けの本を置き、高い層には、小説などの読む時間の多い本を置く。5階には小上がりを設けて、寝たりゆったりしてくつろげる空間を作り出す。

エントランス

広い空間で、待ち合わせとしても利用できる


エントランス

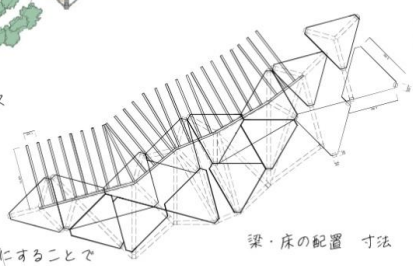

模型全体

全体図（内部）

1階　　エントランス
2階～5階　無人図書館
6・7階　　展望台

構造　鉄骨造
床面　木

鉄骨造に対して
床面を巣と同じ材料の木にすることで
巣のイメージをより印象付ける

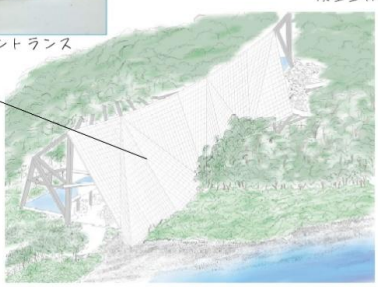

梁・床の配置　寸法

鉄骨

1部をのぞく、鉄骨を三角形で配置して、広い空間ながら強度を維持。

壁

2階から5階の図書館を覆うように架けられた壁。
この壁が、水面からの光を反射して青い光を作り出す。


全体パース



場所

高知県幡多郡大月町柏島。
宿毛湾の南に突き出た大月半島の先端に位置。

透明度の高い海と日本の1/3の魚が生息している地域。光の反射に必要な透明度を誇り、特に魚を連想する鳥2種にあった場所の為選択。
建物の場所は、柏島山の北側に当たる場所に配置。
太陽を背に海を展望台で望められる。

ノミネート入賞

作品番号：12

水がつくる距離
～公共トイレにおける「滞在」の再設計～

中部大学大学院 工学研究科 建設工学専攻 修士２年
安藤　友補
中部大学 工学部 建築学科 ３年
立松　将吾

情報にあふれた現代、公共トイレではスマートフォンを長時間使用する「こもりスマホ」が問題となっている。そこで私たちは、「水」を介して「太陽」を身体的に感じる公共トイレを提案する。水が生み出す空間と光の変化によって、太陽の存在や時間の移ろいを感じる。こうした建築を通して、スマートフォンとの距離を遠ざけ、自然や宇宙との距離を近づけるきっかけをつくる。

水がつくる距離

— 公共トイレにおける「滞在」の再設計 —



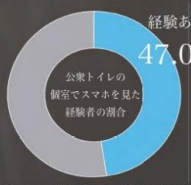
01 僕らの宇宙の情報

～宇宙の情報＝太陽～

宇宙は、私たちの身の回りにさまざまな情報を送り続けている。かつて人々は、空を見上げ、光や影の変化を感じることで、宇宙の情報を身体的に受け取っていた。しかし現代では、スマートフォンの発達によって画面から得る情報が増え、自然や宇宙から届く情報を身体で感じる機会が少なくなっている。そこで私たちは、数ある宇宙の情報の中でも、日常の中で最も身近に感じることのできる「太陽」に着目した。太陽の光、位置、そして時間とともに変化するその姿を、宇宙から私たちの身体へ届く「情報」として捉える。

02 公共トイレにおける「こもりスマホ」

スマートフォンの普及により、公共トイレの個室は、用を足すだけでなく画面を見ながら時間を過ごす場所にもなりつつある。こうした「こもりスマホ」は、個室の滞在時間を長引かせ、利用したい人が使えない状況を生んでいる。また、一人で過ごし、自分自身と向き合う場所であったトイレにまでスマートフォンが入り込み、画面の中の情報に意識が向けられている。本提案では、スマートフォンに向けられた意識を宇宙の情報へと移すことで、公共トイレにおける「滞在」のあり方を再設計する。



出典：Sinabee（2025 年 6 月 6 日）の調査データをもとに作成

03「滞在」を問う敷地



今回の敷地は金山駅南口にある既存の公共トイレを対象とした。敷地を考えるにあたり私たちは「回転率が求められるトイレ」と、「長時間利用の影響が大きい」の2つを重視した。金山駅周辺は鉄道やバス，タクシーなどの公共交通機関が集まるハブである。そのためトイレの長時間利用が次の利用者に影響しやすく、滞在時間を問う本提案に適していると考え本敷地に決定した。

04 水を介した建築のしくみ

・たまる水、たわむ天井



トイレが利用されると上部の天井に水が流れ始める。時間が経つたび水がたまり、重みによって天井の膜がたわむ。

だんだん天井が低くなり、個室内の空間が圧迫される。その変化が利用者の意識を画面の中から天井へと向ける。

水を通して差し込む光と反射による揺らぎで、「太陽」の存在や「時間」の移ろいを感じる。人はスマートフォンとの距離が離れ、宇宙の情報との距離が近づく。



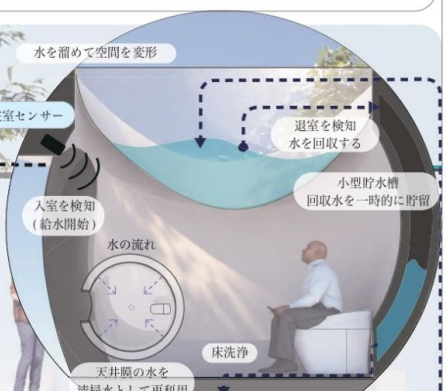
気象・天文データ
（オンラインデータ）

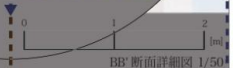
・太陽の位置で水量が変わるカーテン



太陽の位置データを取得し、太陽の動きに合わせて水のカーテンの水量を変化させる。水のカーテンは、内と外、人と人との距離を作るとともに、太陽光を反射し、光の揺らぎを周囲へ広げる。水に反射する光や揺らぎによって、トイレを利用する人だけでなく、滞在する人や通り過ぎる人にも太陽の位置や時間の移ろいを身体的に伝える。

API
（太陽位置計算）





BB' 断面詳細図 1/50

・回収水再利用システム

屋根へ給水
（上水）

回収

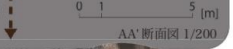
①貯水槽
回収した水を貯水槽に一時貯留する

②ろ過
フィルターでろ過し再利用可能な水にする

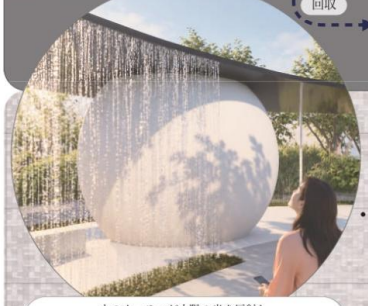
③給水ポンプ
必要に応じて送水

天井膜へ供給

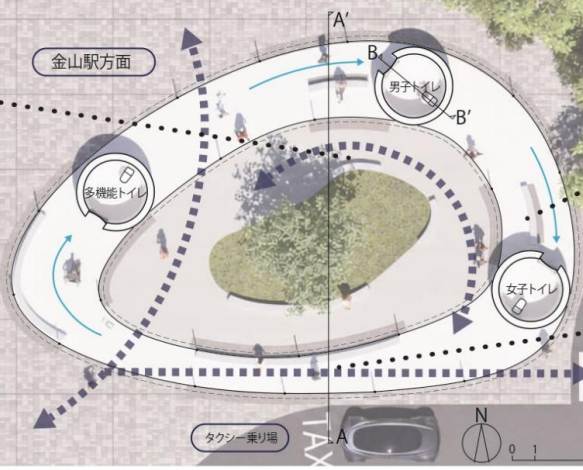
排水（下水）



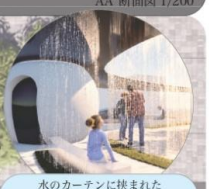
AA' 断面図 1/200



水のカーテンが太陽の光を反射し
スマートフォンに向いていた意識を宇宙の情報へと移す



平面図 1/200



水のカーテンに挟まれた
静かで落ち着きのある空間



水に揺らぐ光が
タクシーを待つ人にも太陽の位置や時間の移ろいを伝える



外観パース

ノミネート入賞

作品番号：13

海に生きる人、火場に集う人へ
―海女小屋から始まるまちのコモンズ―

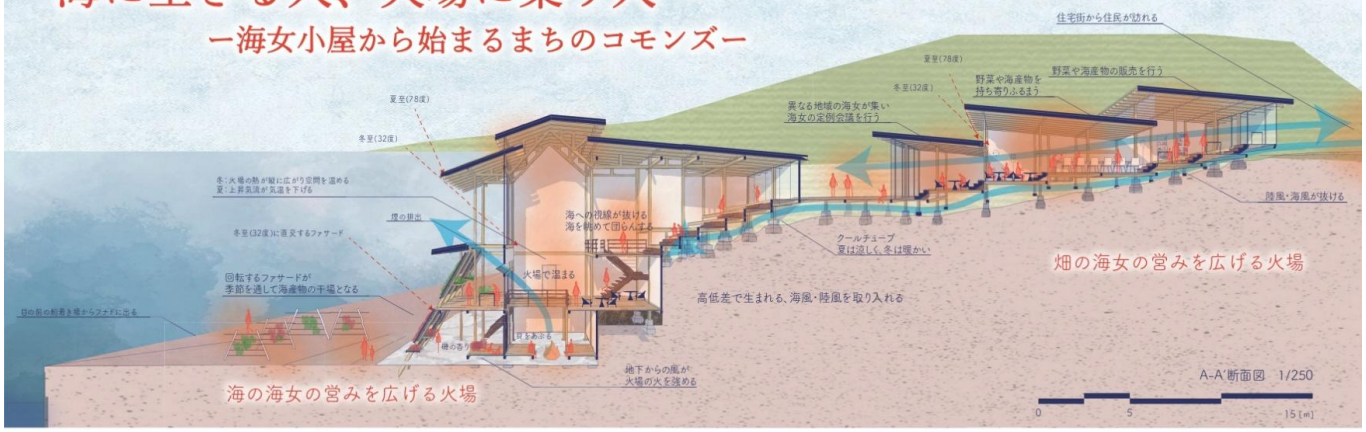
神戸大学 工学研究科 建築学専攻 1 年
中村 梓
篠崎 楓日
寶正 風香

人間は本来、潮や風、季節などの自然のリズムの中で生きてきたが、その感覚は失われつつある。海女は、潜り、耕し、干すことで海と山の自然を読み取り生きる存在である。

本提案では、三重県鳥羽市国崎で、海女小屋の「火場」を現代のコモンズとして再解釈し、環境装置として取り入れる。火場の熱の広がりや段差を利用した通風を建築化することで、海女文化を単に保存するのではなく、自然との関わり方を住民が問い直す場を創る。

海に生きる人、火場に集う人へ

ー海女小屋から始まるまちのコモンズー



01 背景

現代社会

人間は本来、潮の満ち引きや風向き、季節の変化を読み取り、自然のリズムの中で生きていた。

これは特別なことではなく、人間が当たり前に持っていた生き方。しかし現代において、この感覚は失われつつある。

海女と自然の営み

海女は海に潜るだけでなく、畑も耕し、季節に応じて獲るものや干すものを切り替えながら、自給的な暮らしを組み立ててきた。

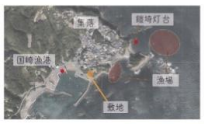
つまり海女は、海と山の自然を読み取り生きるという暮らし方そのものを体現する存在である。



02 敷地

三重県鳥羽市国崎

国崎は海と山が近く、漁業と農業が両立する地形を持つ。海女文化が残り、自然と共に生きる知恵が息づいている。



03 提案　火場のコモンズ



人と自然、過去と現在、海の営みと山の営みといった様々な要素が入り混じりながら蓄積されていく

社会文化的な器

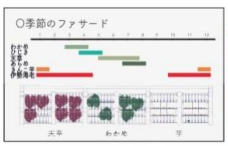
火場を現代のコモンズとして再解釈

火場を海女の生業を象徴する環境装置として取り入れる

海女の生き方を手掛かりに、

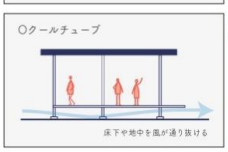
現代の暮らし方、自然とのかかわり方そのものを問い直す

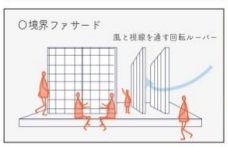




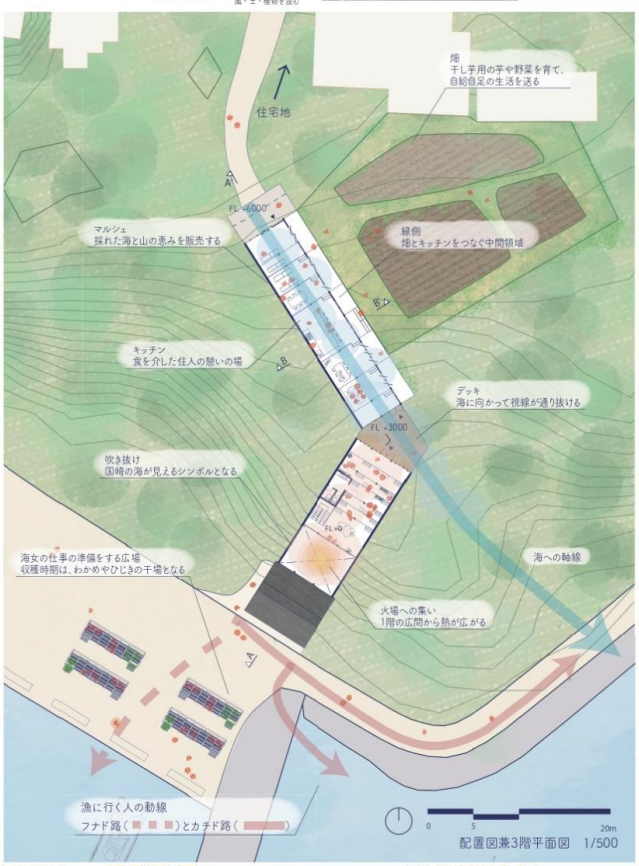




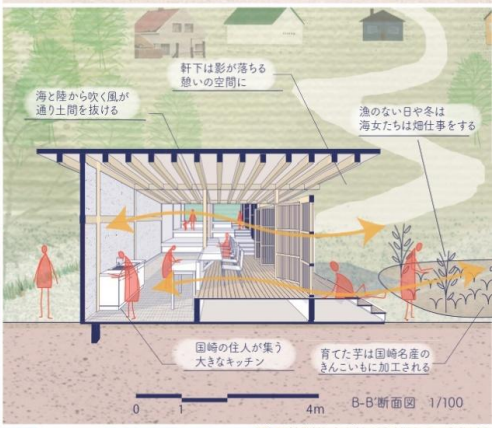


















ノミネート入賞

作品番号：17

太陽の教会
(光学設備を用いた神聖性の表現)

ものつくり大学院 ものつくり学研究科 ものつくり学専攻 修士１年
村山 海人

教会のステンドグラスにおいて神聖性を生み出しているのは、神の図像ではなく、複雑に分布する色彩と光の現象ではないだろうか。本設計は、プリズムという光学設備を通して、太陽光という宇宙現象を様々な色や形に分解し、神聖性を生み出す教会である。時間や季節、天体運動によって変化する光は、神との交信ではなく、宇宙そのものと交信しているような感覚をもたらす。その変化し続ける光の現象が、空間に神聖性を与える。

太陽の教会

光学設備を用いた神聖性の表現

参考文献：Derek Phillips（『Daylighting（昼光設計）』）Eugene Hecht（『Optics（光学）』）, Julio Chaves（『Introduction to Nonimaging Optics』非結像光学入門）, Warren J. Smith（『Modern Optical Engineering』現代光学設計工学）.

写真：© Kölner Dom Richter Fenster Detail— Geolina163, CC BY-SA 3.0 DE
Kölner Dom Richterfenster bei Nacht — Raimond Spekking, CC BY-SA 4.0



1. ステンドグラスの神聖性とは？



※写真は CC ライセンスの許諾を得て使用しています

中世の教会において、ステンドグラスは「聖書の物語」を光に乗せていた。しかしゲルハルトリヒターが手がけたケルン大聖堂のステンドグラスには図像がなく、カラーチャートのような無数の色片が存在するだけである。

だが人は、そこに無意味な色面ではなく、神聖性を感じている。それは一体なぜか？それは、非線形な色分布や光の揺らぎ、そういった偶然性に対して、「自然を超えた秩序」を感じるからである。つまり神聖性とは、図像ではなく“知覚の限界”によって発生するのではないだろうか？もしそうであるならば、これからの教会建築に必要なのは、神を描くことではなく、太陽の光という宇宙現象を複雑化し、人間の知覚へ接続することなのかもしれない。

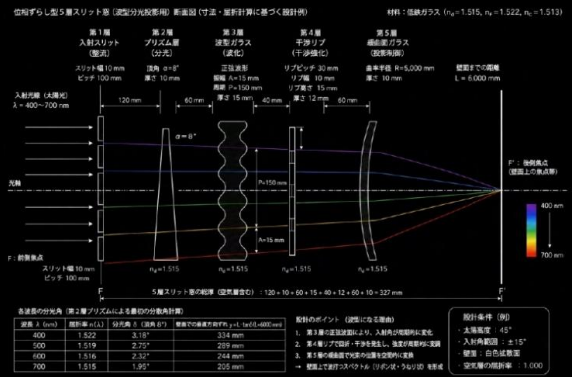
2. プリズムと太陽の運動

太陽光は、私たちにとってはただ白い光として見えている。しかし実際には、その内部には無数の色が重なっている。これを、プリズムによって可視化したい。プリズムによる分光は、その不可視だった色の違いを可視化し、空間の中へ表現できる装置だ。この分光によって現れる色彩は、固定されたものではない。太陽の光が朝と夕方で色が変わるのは、太陽高度と大気層の厚みが変化するからであり、季節によって光の角度が変わるのは、地球の地軸が傾いているからだ。そこには常に、天体運動と環境条件の痕跡が含まれている。つまりプリズムを通して可視化される色彩は、単なる装飾ではなく、宇宙の運動が空間に投影された痕跡なのである。



※写真は CC ライセンスの許諾を得て使用しています

3. プリズムを用いた光学設備の提案



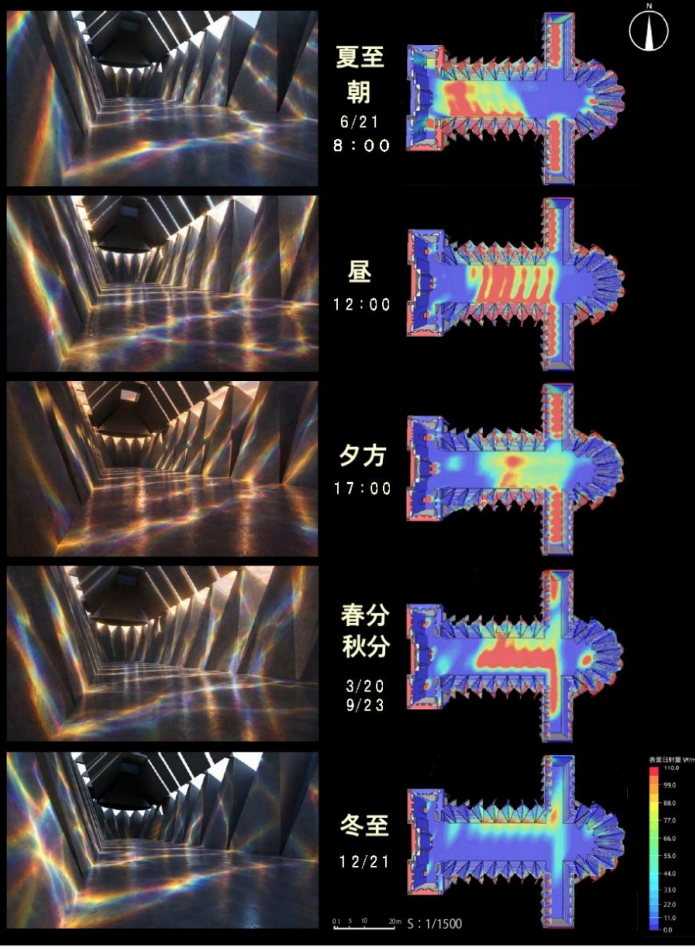
プリズムで分光した直線の光を波状に曲げるために、カメラの複層レンズを参考にした5層スリット窓を設計した。この窓はケルン大聖堂のような不規則な偶然性を生み出し、時間ごとに形や強弱が変わっていく。

4. 建築・採光計画



建築様式はラテン十字型の単廊式であり、入口から祭壇までの軸線を強調しながらも、側廊をもたない一つの大きな礼拝空間として構成している。壁面は外に向かって傾斜になっており、天窓からの光を反射するポケットのようになっている。身廊では天窓と折半構造の壁が一体となっており、立体的な陰影と反射する光がリズム感を演出する。またスリット状の天窓によって光を床全体に映し出す。対して翼廊では光の模様がそのまま映し出されるように、平面の壁となっている。

5. 環境シュミレーション・日射解析



ノミネート入賞

作品番号：22

鳥暦

近畿大学大学院 建築学研究科 建築デザイン専攻 1 年
神谷 直輝

現代人は、カレンダーや天気予報によって季節や天候を情報として知る。一方、渡り鳥は複雑な環境変化を身体で読み取り、地球を移動している。鳥の行動そのものを暦と捉え、そこに現れる自然と宇宙の兆候を建築が人間の身体へ翻訳する。鳥を介して季節や土地の状態を読み、暮らしや営みを変化させながら、人の時間を地球の時間に同期させる提案。

鳥暦

渡り鳥の飛来を土地の時間に編みこむ観測施設

八郎潟の干拓は、渡り鳥に餌場を与え、ねぐらを奪った。海面下のこの土地は、排水を止めれば湖に戻る。保護区の緑で雁の飛来を記録し、群れが増えれば冬の田に水を戻し、北へ帰れば水を落とす。人は、渡り鳥の暦を通して地球の時間に同期する。

01 | 身体へ還る暦

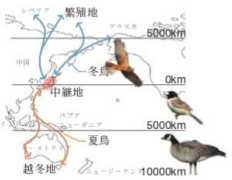
現代人は、カレンダーや天気予報によって季節や天候を情報として知る。一方、渡り鳥は複雑な環境変化を身体で読み取り、地球を移動している。鳥の行動そのものを暦と捉え、そこに現れる自然と宇宙の兆候を建築が人間の身体へ媒介することを試みる。



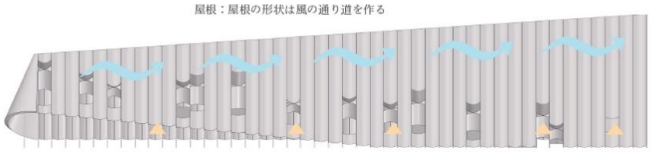
出典：1ヶ月カレンダー



出典：TBSテレビ「天気予報」

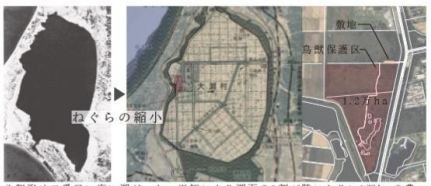


屋根：屋根の形状は風の通り道を作る



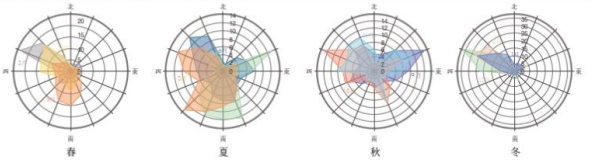
スロープ：高さ変化が、バードウォッチャーの視点に変化を生む

02 | 秋田県南秋田郡八郎潟町



八郎潟は二番目に広い湖だった。干拓により湖面の8割が陸になり1.2万haの農地が冬鳥の餌場となった一方で、ねぐらとなる水面は大きく縮小した。海面より4mも低いこの土地は、24時間休みなく、水をくみ出しており、排水を止めれば湖に戻る。オオセッカの繁殖が秋田県内で初めて確認された事をきっかけに、1977年（昭和52年）に国指定大潟草原鳥獣保護区が指定。200種類ほどの野鳥が観察できる。

03 | 風から読み解く形態



出典：建築設計用気象データより作成」

冬は日本海からの季節風が西から北西の間で吹き、強い風の日の8割がこの向きに集まる。夏は南南西の穏やかな風が続く。屋根を時計回りに振ることで、西面で冬の季節風を受け流し、南面で夏風を受け止める。

東西の軸からわずかに時計回りに振ることで、風に応える角度が、野鳥を見るための角度でもあった。

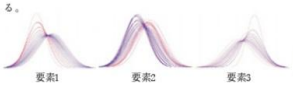


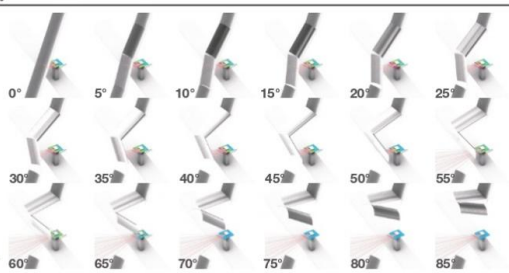
04 | 太陽に従う開口と渡り鳥

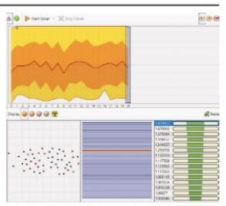
雁の畔立ちは、太陽の運行に応じて日の出前後に起こる。500m先の保護区を望み、12月の夜明けの光で時間を知るために開口が要るが、半屋外空間では開くほど天空への放射損失が増え、平均放射温度が下がる。開口角度の最適化により、その中間解を導く。

要素1：野鳥の可視率を最大化
要素2：12月夜明けの受光を最大化
要素3：天空放射損失の最小化

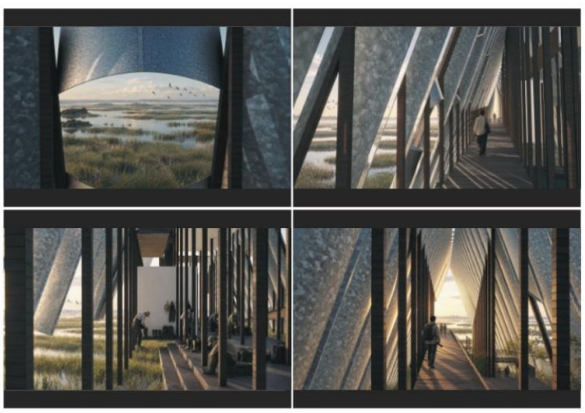
開口の動きによって季節、時間の推移を身体に記憶する。

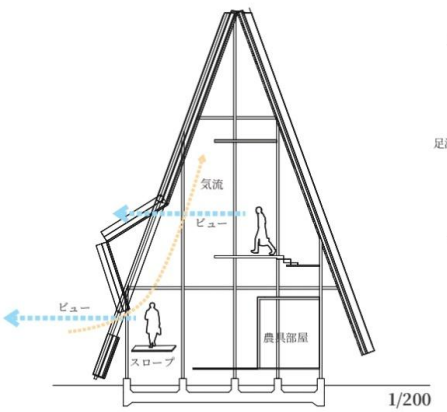




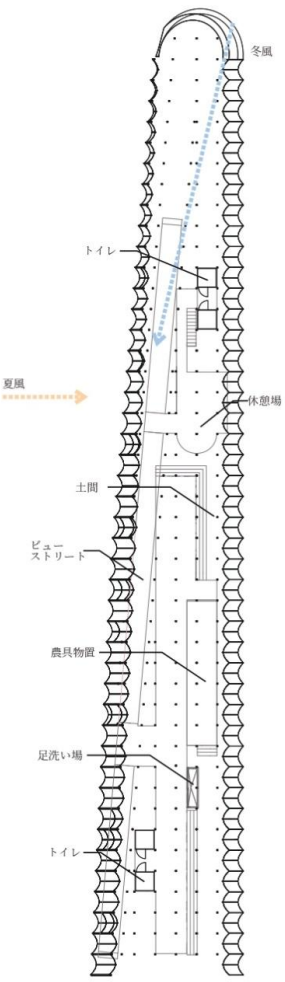


開口角度は要素1-3のパラメーター用い、GrasshopperのLadybugを用い、Galapagosを利用した最適化シミュレーションを行うことで窓の角度導いた。





1/200



1/400

ノミネート入賞

作品番号：23

-273｜15

早稲田大学大学院 創造理工学研究科 建築学専攻 2 年
辻本 雄一朗
早稲田大学 創造理工学部 建築学科 4 年
中川 香乃

外界の情報を選び取り、光と熱を通して季節や時間を身体で感じる住宅を設計する。宇宙を象徴する「-273℃」から、人が暮らす「15℃」へ。その連続の中で、厚いコンクリートを境界として生活を穿つ。窓らしきは宇宙の現在を選び、壁と配管は季節を蓄え、遅らせて伝える。光と熱の移ろい、風化や生活の痕跡を建築の厚みが受け止める。建築を閉じることで外界との関係を選び直し、身体と宇宙を結び直す住まいをつくる。

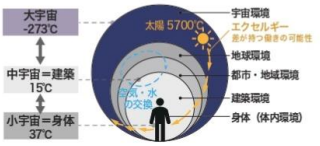
-273|15

-宇宙と身体の関係を再調停する家-



外界の情報を選び取り、光と熱を通して季節や時間を身体で感じる住宅を設計する。
宇宙を象徴する「-273℃」から、人が暮らす「15℃」へ。その連続の中で、厚いコンクリートを境界として生活を穿つ。
窓らしきは宇宙の現在を選び、壁と配管は季節を蓄え、遅らせて伝える。光と熱の移ろい、風化や生活の痕跡を建築の厚みが受け止める。
建築を閉じることで外界との関係を選び直し、身体と宇宙を結び直す住まいをつくる。

01 BACKGROUND 身体を包む三つの宇宙

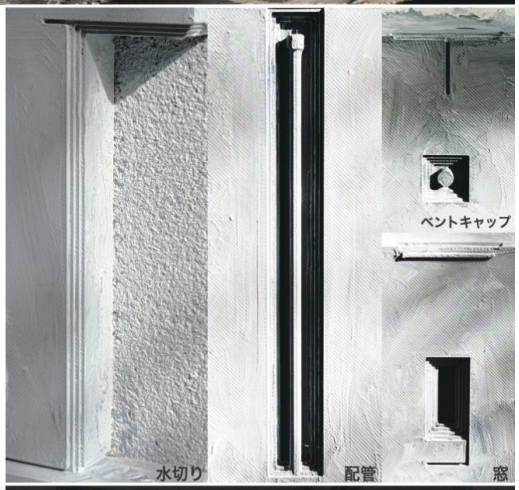


太陽から届く光と、地球が宇宙へ放つ熱。私たちはその交換が続く環境の中で生きている。身体という小宇宙は、建築という中宇宙を介して大宇宙へ連なる。三つの宇宙は、光や熱、空気を受け渡す交換の連鎖である。

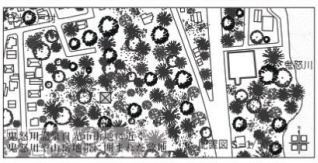
02 PROPOSAL エクセルギーを調整する装置



環境との温度や濃度の差が持つ、働きを生み出す可能性がエクセルギーである。身体も建築もエネルギーや物質を受け取り、その可能性を使う過程でエントロピーを生成する。本計画は、生成と排出の場所、速さ、経路を編成する。**選ぶ、遅らせる、渡す。**その三つの操作によって差異の寿命を伸ばし、身体へ届く環境を組み立てる。



03 SITE 強い外部としての自然に閉じる

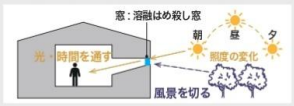




日光近郊の自然豊かな敷地で、**自然という強い外部にあえて閉じる。**視線や騒音、風景といった過剰な情報を削ぎ落とし、太陽の運行や昼夜、季節の変化だけを選んで取り込むことで、**身体が再び季節や時間を知覚する住まいをつくる。**

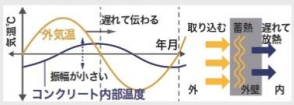
04 DESIGN-SECTION エンタルピーを再調停する境界としての外皮

I 光と時間を受け取る窓



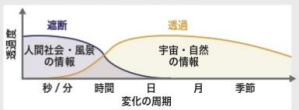
窓を風景の額縁から、**時間を受け取る装置**へ変える。厚い壁を貫く窓らしきは、周囲の景色を切りながら、天候や昼夜に伴う照度の変化を内部へ届ける。光のわずかな変化が意識に上る。

II 季節を遅らせて伝える壁



コンクリートの厚みを**外気の変化を遅れて伝える媒体**とする。蓄えた熱が内部を移動するあいだに、内壁の温度は外気とは異なる速さで変化する。その応答を半年8760時間で追う。

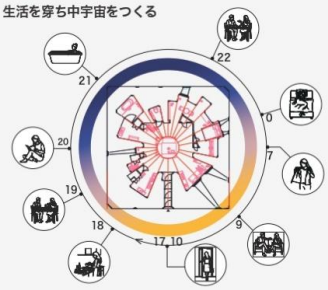
III 情報のフィルターとしての外皮



外皮を変化の周期を選別するための境界として捉える。視線や騒音といった**断片的かつ過剰な情報を遮り、**太陽の運行や昼夜、季節といった、**長い宇宙の周期だけを身体へ届ける。**

05 DESIGN-PLAN 身体の距離から作られる中宇宙

生活を穿ち中宇宙をつくる

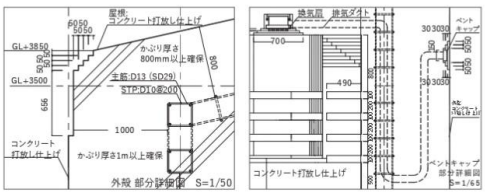


壮大な宇宙との関係を、床に座る一人の身体からつくり直す。**身体という小宇宙を原点に、距離や行為の順序を、厚いコンクリートへと穿つ。**中心には用途を定めない空洞を置き、その周囲に必要な機能を刻む。身体から住まいの形を彫り出し、使いながら居場所をつくり続ける。その定点で光と熱が伝える宇宙の時間を身体で受け取る。



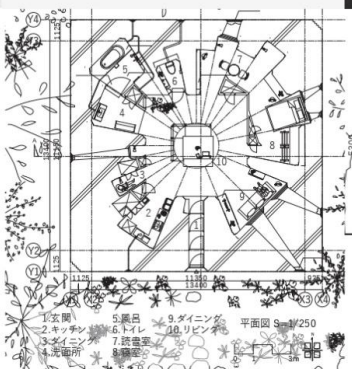


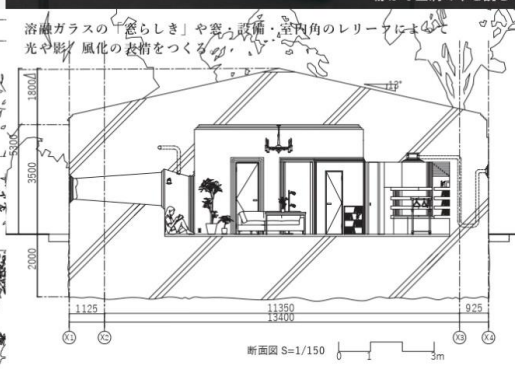
06 DETAIL 風化により宇宙の時間を刻む



コンクリートは打放しのまま外部に晒し、黒ずみや風化を建築の時間として受け入れる。窓やベントキャップの周囲にはレリーフ状の水切りを刻み、雨筋や汚れの現れ方そのものを立面として設計する。

内部には**配管を蛇行させ、**熱をゆっくり移動させることで**温度のグラデーションをつくる。**一方表層では、**風化は受け入れ、鉄筋を深く配置することで、変化する外殻と長く残る構造体を両立させる。**





ノミネート入賞

作品番号：29

共星

愛知工業大学 工学部 建築学科 4 年
藤村　悠里
堀江　真亜矢
蔦木　美佑

「共星」は、宇宙空間を新たな公共空間として捉え、人と宇宙を結ぶ建築である。建築全体に観測・通信・情報技術を統合し、宇宙や地球の変化をリアルタイムに体験できる環境を構築する。情報技術は自然を代替するものではなく、人が宇宙を理解し、自然とのつながりを深めるための媒介として機能する。誰もが宇宙へアクセスできる未来を見据え、建築を通して新しい価値観と持続可能な社会を育むことを目指す。

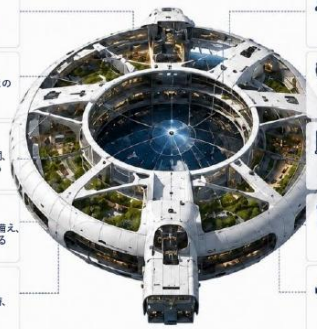
共星

―ひとつの星に生きることを知る―

宇宙へ旅立つことは、地球から離れることではなく、
地球を見つめ直すことである。宇宙と直接交信し、
情報技術を通してその営みを体感することで、
人類が同じ「宇宙船地球号」の乗組員であることを認識し、
持続可能な未来への意識を育む公共建築を提案する。



宇宙船の機能 ｜ 大型客船のような多様な機能を備えた宇宙船



- **ブリッジ／管制室**
  航行制御、システム監視、宇宙・地球との通信を担う
- **観測・交信センター**
  宇宙や地球の観測、宇宙船との直接交信を行う中枢施設
- **居住モジュール**
  長期滞在に適応した個室空間、健康や共有リビングを備える
- **医療・バイオモジュール**
  医療施設やバイオ研究設備を備え、乗員の健康と研究活動を支える
- **エネルギーコア**
  太陽光発電やエネルギー貯蓄、配電管理を行う心臓部
- **展望デッキ／地球ラウンジ**
  宇宙から地球を一望できる展望空間、イベントや講演も開催
- **ラウンジ／交流エリア**
  乗員や来訪者が交流し、学びや対話が生まれる空間
- **エンターテインメントエリア**
  VR体験、シアター、ライブホール、図書館などの文化施設
- **レストラン／カフェ**
  食事や休憩を楽しむ空間、地球食の文化を体験できる
- **ドッキング／エアロック**
  宇宙船との接続、物資や人の乗降を行う出入口

その他の機能：教育センター／スポーツジム／スパ／キッズルーム／ショップ／礼拝室／会議室／工房　など

宇宙との交信がもたらす意識の変化と未来への行動



01	02	03	04	05
宇宙へ行く	宇宙を体験する	地球を客観的に見る	地球は一つの宇宙船だと気づく	協働・持続可能な未来へ
地球を離れ、宇宙という新たな環境へ身を置き、宇宙そのものとつながる。	宇宙環境を五感で体験し、宇宙の壮大さや多様な営みを感じる。	宇宙から地球を眺め、気候・環境・資源・社会のつながりを理解する。	国境や対立を超え、人類が同じ宇宙船地球号の乗組員であると認識する。	すべての命が共存できる持続可能な未来に向けて、行動し、未来をつくる。

宇宙と地球をつなぐ体験を通して、私たちは同じ宇宙船「地球号」の乗組員として、未来を共に築いていく。



情報技術を取り入れ ｜ 宇宙と人をつなぐ知的基盤

情報技術やAIは、宇宙との交信を深め、体験を拡張するだけでなく、
宇宙船そのものの仕組みや運用を最適化し、安全で持続可能な宇宙での暮らしを支える。

01 宇宙での交信を可視化する



- **AI×観測・可視化**
  天体や宇宙環境の情報をリアルタイムで取得・可視化
- **見えない現象を体感**
  データや映像で、肉眼では捉えられない宇宙を体感

02 体験を拡張し、深める



- **AR・XRで宇宙を体験**
  没入感のある体験で、理解と興味をさらに広げる
- **AIパーソナルガイド**
  興味やレベルに合わせて情報や体験を提案

03 宇宙船内部の最適化と安全性



- **AI総合制御システム**
  環境・エネルギー・設備を最適化し、快適で効率的な運用を実現
- **予測保全・安全管理**
  異常の予測やリスク検知で、安全な宇宙生活を支える

04 地球とのつながりを強化する



- **リアルタイム通信**
  地球と高速・安定通信でつながり、データや映像を共有
- **クラウド連携・データ共有**
  研究機関や教育機関とつながり、知識や経験を共有

情報技術は、宇宙と人をつなぎ、宇宙船そのものを賢く進化させる。
宇宙との対話をより豊かにし、持続可能な未来へとつなげる。

未来の公共インフラになる流れ

1. 研究・実証段階（～2035年頃）	2. 限定運用段階（2035～2045年頃）	3. 民間参入・拡張段階（2045～2060年頃）	4. 公共インフラ化（2060年以降）
政府・企業・研究機関が中心となり、宇宙船の技術開発と実証を行う。	一部の研究者・教育機関・企業ミッションを中心に運用を開始。	民間企業の参入により、サービス拡充・コスト低減・運用体制が拡大。	誰もが利用できる宇宙の交通・学び・文化・研究の基盤に。

技術の進化 → コストの低下 → 利用者の拡大 → 社会的価値の向上



ノミネート入賞

作品番号：31

星の下の地底博物館

愛知工業大学　工学部　建築学科建築学専攻　4 年
宮嶋　大彰
水谷　有羽

「日本一の星空」を観光資源として活用する一方で、観光客の増加は森林の伐採や光害を招き、守るべき星空そのものを壊す可能性がある。そこで本計画では、森林を切り開くのではなく、建築を地中へ沈める。地表の森を残しながら地下 50m へと降り、地層の変化を体験することで、星空だけでなく、その下に広がる大地の歴史にも目を向ける。自然を消費する観光から、自然と共存しながら地域の価値を伝える観光への転換を目指す。

星の下の地底博物館

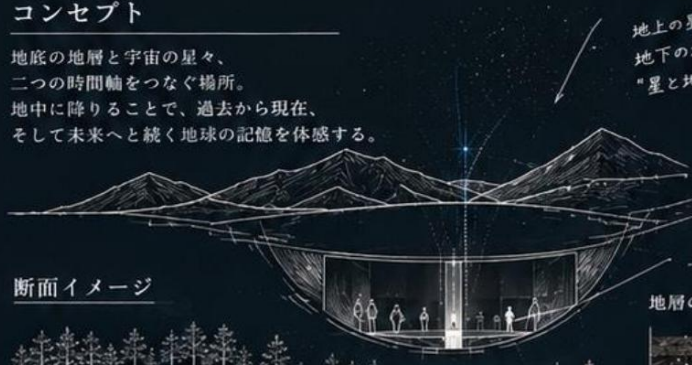
── 地下に降りるたび、地球の記憶と、宇宙の広がりに出会う ──

阿智村の豊かな自然と、世界一の星空を背景に、
地中に広がる地層と、宇宙をつなぐ地底の美術館。
地上の喧騒から離れ、地下50mへと降りるその瞬間から、
私たちは地球の歴史と、宇宙の時間に包まれる。



コンセプト

地底の地層と宇宙の星々、
二つの時間軸をつなぐ場所。
地中に降りることで、過去から現在、
そして未来へと続く地球の記憶を体感する。

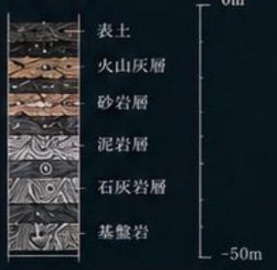


断面イメージ



① エントランスホール
② エレベーター（地質体験）
③ 地層展示エリア
④ 宇宙展示室
⑤ 企画展示室
⑥ カフェ・ショップ
⑦ 展望ラウンジ

地層の変化



星空を見上げる地底の空間



宇宙展示室
地底にいながら、まるで宇宙に浮かぶような
星空の演出を体験できる。



地層展示エリア
地中の地層を実際に見ながら、
地球の歴史を感じることができる。



カフェ・ショップ
地底の独特な空間の中で、
ゆったりと過ごせる空間。

エレベーターで降りる

エントランスから地下50mへと続くエレベーターは、
地層の変化をリアルに感じることができる特別な体験。
ガラス越しに見える地層は、まるで地球の歴史を覗いているような感覚を与える。



0m　地表
緑の景色から、
地球の下へと降り始める。

-5m　表土層
植物の根や土の層が見え、
生命の痕跡を感じる。

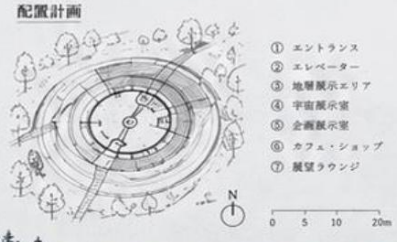
-15m　砂岩層
砂の層が広がり、
海の記憶が残る。

-30m　泥岩層
海の底面の広さな
層が見える。

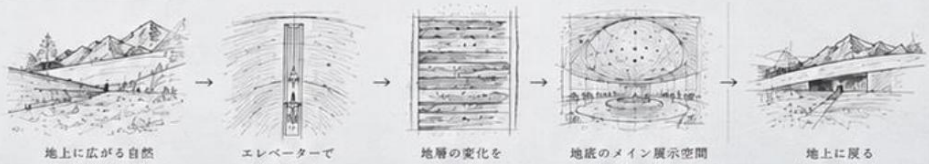
-45m　石灰岩層
長い年月をかけて形成された
白く美しい層。

-50m　基盤岩
地球の奥に近づくような
最終な岩盤。

配置計画



エスキス（コンセプト・空間）





地底に眠る、地球の記憶。
そして、星とつながる未来へ

作品番号：1

The Third Place
～心と身体をととのえる図書館ホテル～

活水女子大学 健康生活学部 生活デザイン学科 3 年
岸川　くるみ
溝上　真唯
谷川　彩葉

本提案は、自然の時間を感じながら心身を整える宿泊型図書館である。屋内と屋外の間に半屋外の Third Place を設け、光・風・熱・音・香りといった自然現象を身近に感じられる環境をつくった。さらに、円状に配置した縦ルーバーによって生まれる日陰を時間の指標とし、一日の変化を建築そのもので可視化する。宿泊によって自然の移ろいを一日を通して体験し、利用者を自然本来のリズムへと導く。

The Third Place ～心と身体をととのえる図書館ホテル～

現代の都市がもつ加速した時間は、自然や宇宙が本来刻む時間の流れとは異なる。私たちはその速い時間の中で生きているが、時には自然本来のリズムに身を委ね、心身を"ととのえる"場が必要である。本提案は、自然の時間に再接続し、心と身体を回復させる宿泊型図書館である。半屋外の環境で、光・風・熱・音・香りの移ろいを感じながら滞在することで、利用者はゆるやかな本来の時間へと調律されていく。

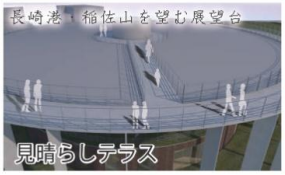


敷地外周部に森をつくり適度に現代社会と遮断。落葉樹や季節の花で年間の時の流れを感じられる。

敷地は長崎市中心部にあり、周囲はオフィス街。現代社会の加速した時間の中で生きている人が多いエリアである。

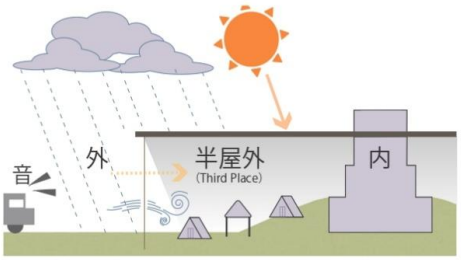






外でも内でもない Third Place

屋外はうるさい・暑い・雨に濡れるといった自然の影響をうけ、室内では自然を感じにくい。そこで、**自然を感じながらも快適に過ごせる半屋外空間 (Third Place)** を形成する。

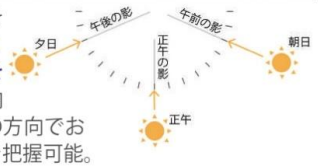


なぜ宿泊型図書館なのか？

図書館は**静かな空間**である。静かな空間で過ごす時間は、私たちの感覚を研ぎ澄まし、宇宙・自然がもつ微細な変化を受け取る力を高めてくれる。さらに、光・風・温度の移ろいを**一日の中で連続的に体験できる**よう、本提案では"宿泊型"の図書館を計画した。

時の流れ・自然の変化の可視化

縦ルーバーを円状に配置し**1日の時の流れを可視化**。施設内の人々は日陰の方向でおおよその時間を把握可能。

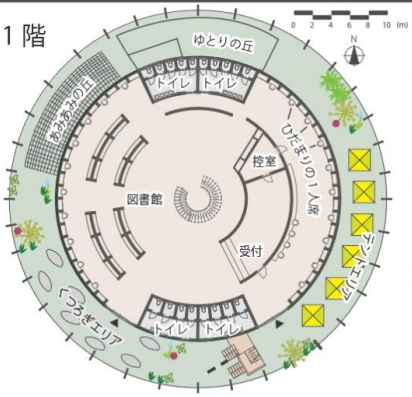


縦ルーバーの環を**半透明のテント屋根**で覆うことで、屋外の明るさの変化をやわらかく感じることのできる半屋外空間を形成する。

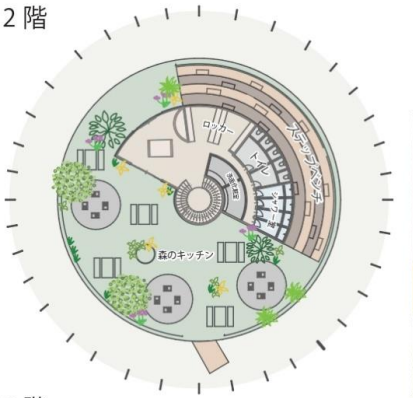


平面計画　- 自然・宇宙を感じる多様な半屋外空間 -

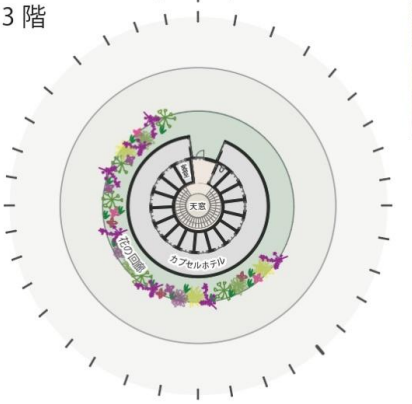
1階



2階



3階

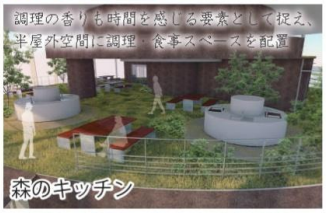


屋内図書館で借りた本を**多様な半屋外空間へと持ち出し、本の世界と自然・宇宙に没入**していく。書籍は屋内で適切保管し、室内にも閲覧スペースを設置。悪天候時も安心して過ごせる**屋内空間を確保することで、心を落ち着けながら半屋外で過ごすことができる**。

半屋外に設置したテントで就寝する形式とし、ホテルでもキャンプでもない**"第 3 の宿泊体験"**を提供。室内カプセルホテルも併設し、悪天候時にはそちらを選択可能とした。**安心できる屋内の選択肢を用意することで、半屋外で自然・宇宙と無理なく向き合える。**









作品番号：4

制御不能な地層のうえで暮らす サーバーの熱を都市と身体へと循環させる、人新世の環境建築

東京都市大学大学院 総合理工研究科 建築・都市デザイン専攻
建築学領域　1 年
沼野　仁哉

人々は、太陽や月、潮汐や季節の変化を身体で読み取り自然と生活をしていた。本提案では、現代の情報社会を支えるデータセンターを人新世における新しい自然として捉える。情報処理によって生まれる廃熱を温水として回収し、温泉や隣接テナントの空調・給湯設備へ循環させる。情報から生まれた熱に触れることで、人工物が環境条件となる時代を可視化し、失われつつある身体と環境、宇宙との接続の関係を再構築する建築を提案する。

制御不能な地層のうえで暮らす

サーバーの熱を都市と身体へと循環させる、人新世の環境建築



01.概要

本提案は、データセンターのサーバーを単なる情報処理装置ではなく、熱を発し、水を温め、都市の環境条件をつくり出す「新しい自然」として捉える建築である。

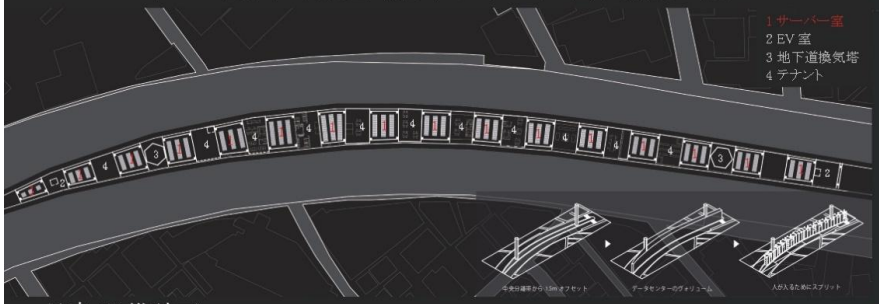
02.現状の問題

AIをはじめとする情報インフラの普及に伴い、郊外を中心に建てられてきた。防犯や環境の観点から閉鎖的な外観をもち暮らしへ還元される使われ方はほとんどない。近年では都市部への立地も進みつつあるが、防犯上の観点から所在地は積極的に公開されず、社会のどこに存在しているのか実感しにくい。情報技術が発達している現在において最も身近であり、暮らしから乖離した不可視のインフラの1つがデータセンターである。



03.平面計画

都市の余白としてある、中央分離帯に計画をする。
サーバー室とテナントを交互に配置し、データセンターに人の隙間をつくる。



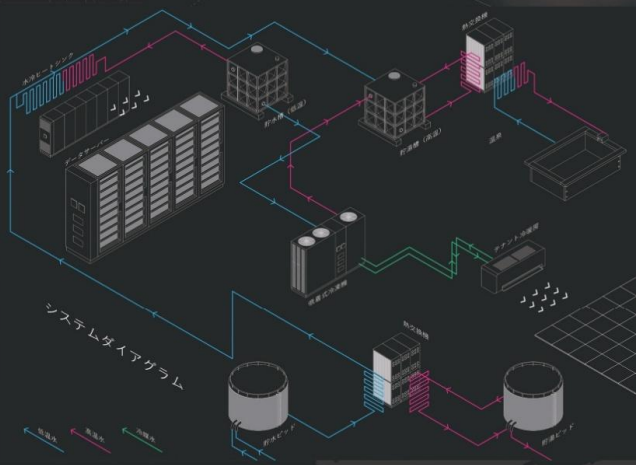
04.環境・設備計画

データセンターから発生する廃熱を温水として回収し、建築内に循環させます。通常であれば外部へ捨てられる熱を、温泉、隣接するテナントの空調、給湯設備へと利用する。情報はサーバーで計算され、計算は熱を生み、その熱は水に移り、水は人の身体や都市の日常を温める。
この建築では、サーバー室は完全に開かれるわけではない。
防犯性や管理性を確保しながら、その周囲に熱を受け取る温泉、テナントを配置する。
人はサーバーそのものに直接触れるのではなく、サーバーが生み出した熱によって温められた水や空気を通して、情報社会における自然の存在を身体的に感じることになる。


花屋 花のための温熱環境


サーバーの熱による温泉


新しい自然としてのサーバールーム



05.断面計画

山手トンネルの地下道路の換気設備と一体化して計画をした。
給気口と排気塔は、既存の位置で発電機を設置しデーターセンターの電力へ
サーバー塔の上部には、サーバーの熱からできた温泉を設置



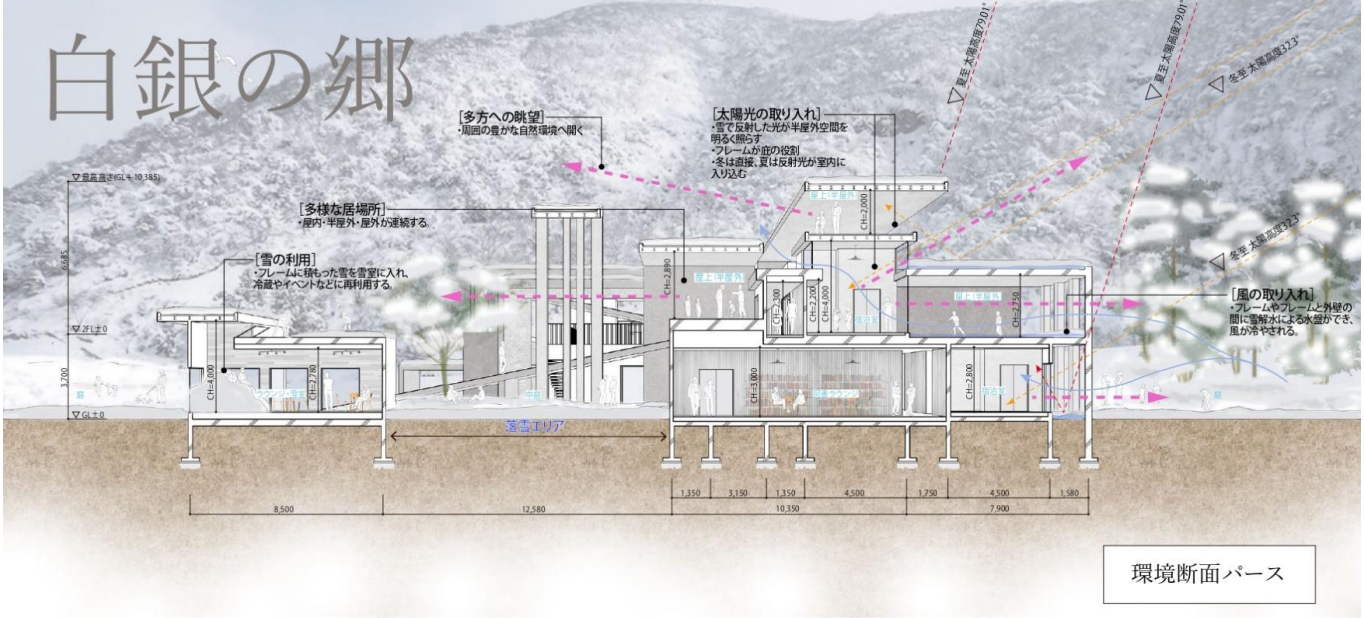
作品番号：5

白銀の郷

神戸大学大学院 工学研究科 建築学専攻 修士 1 年
阿部 稜平
池之内 圭悟
中村 龍二
宮本 泰幸
小澤 俊元

気候変動が深刻な現代の暮らしは、建築がシェルターとして強固になり、人と自然の関係が希薄になった。自然学習の場である林間学校でさえ、建築は内部に閉じ、人々の暮らしは普遍的なハコの中に納まっている。提案では、豪雪地帯である滋賀県高島市箱館山の林間学習施設において、フレーム型の建築を設計し、雪との関わり方を多様化させる。そして、自然を通年活用し、暮らしを豊かにする、“その土地ならでは“の建築を設計した。

白銀の郷



環境断面パース

01. 背景

■ 現代の自然との交信

かつて人々は、自然の壮大さを受け入れ、季節や気候の変化を活かしながら生活していた。ゆえに建築も、その土地に馴染ませ土着的に発展してきた。
しかし今日では、自然に抗い建築を閉じることで四季の移ろいに対応している。自然や宇宙の恵みであった雨や雪は、避けられるべき対象と成った。

02. 敷地　滋賀県高島市

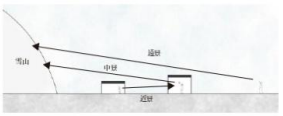
■ 林間学校　もくもくの里



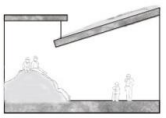
滋賀県高島市箱館山の内部に位置する大阪府吹田市の保有する保養施設。吹田市の小学生が年間を通じて宿泊研修（林間学校）として訪れ、自然学習を行う。
この地域は冬には50cm ～ 1m ほどの雪が積もる豪雪地帯であり、垂直積雪量の指定は150cmとなっている。

03. ダイアグラム

■ フレーム



フレームによって雪という自然現象を、建築内外に多様な境界を設け、自然と人の関係にバリエーションを生む装置へと変換する



傾斜フレームで雪を落とし、雪室で貯雪する



雪が近景・遠景をぼかし、人との関わりや雪の景を強調



屋根や通路に雪が積もり、より近い距離で雪と触れる



冬に溜まった雪が夏に雪室として利用される

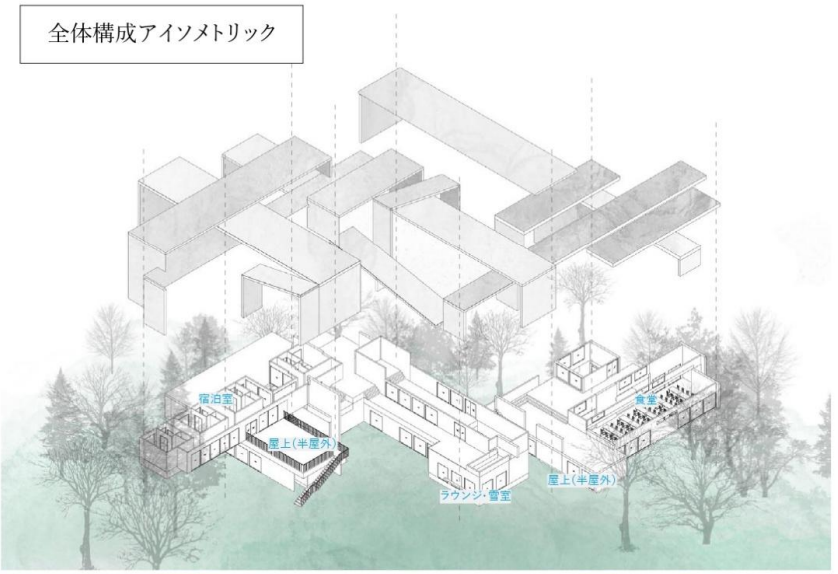


夏には強く遠景や近景への視線が通る

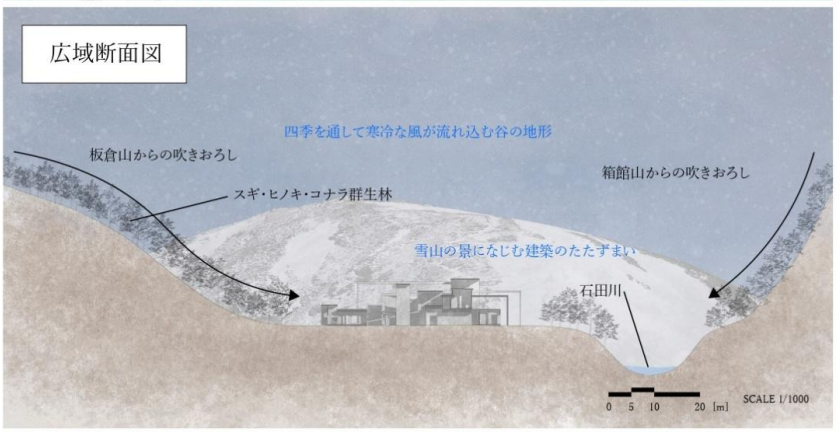


冬には近景・遠景がぼかされ、より雪への視線や抜けた先の景が強調される

全体構成アイソメトリック



広域断面図



作品番号：7

微生物的都市

神戸大学大学院 工学研究科 建築学専攻 修士 1 年
森田 雅都
宮川 湧雲
福山 颯汰

都市の緑は、眺める対象となり、人が自然の循環に触れる機会は失われつつある。本提案では、都市で捨てられる落ち葉を集め、人の手で攪拌し、時間をかけて腐葉土へと還す「土をつくる建築」を提案する。温度や湿度、匂い、季節によって変化する落ち葉に触れる行為を通して、自然の微細な変化を身体で読み取る。花時計を、人と自然が再び交信する場所へと更新する。

微生物的都市



問題提起

現在の都市緑化は、壁面に緑を取り付けることや高層建築の低層部に集約的に木々を集めることが多く、そのどれもが表面的に自然を取り入れることにとどまっている。また、その緑化は多くの資金やエネルギーが費やされ維持されており、そのコストに見合う結果が得られているとは言い難い。さらに、都市の街路樹の枝や落ち葉はそのほとんどが可燃ごみとして処理されており、その存在は見えないものとなっている。ただ眺めるだけで人がかかわることのない緑はバイオフィリックとはかけ離れた位置に存在すると考えられる。



敷地　神戸市花時計周辺

花時計は、神戸市役所・東遊園地・旧居留地に近く、三宮駅からウォーターフロントへ向かう都市軸上に位置する。都心の中で緑や花に触れ、待ち合わせや休憩ができる場所であり、長年神戸市民に親しまれてきた街の象徴でもある。



提案

そこで、都心の中で土を作り出す建築を提案する。落ち葉を腐葉土にするプロセスは人のかかわりが必要不可欠である。そのプロセスを通じて現代の人々が忘れかけている自然との触れ合いを取り戻す機会を提供する。











作品番号：10

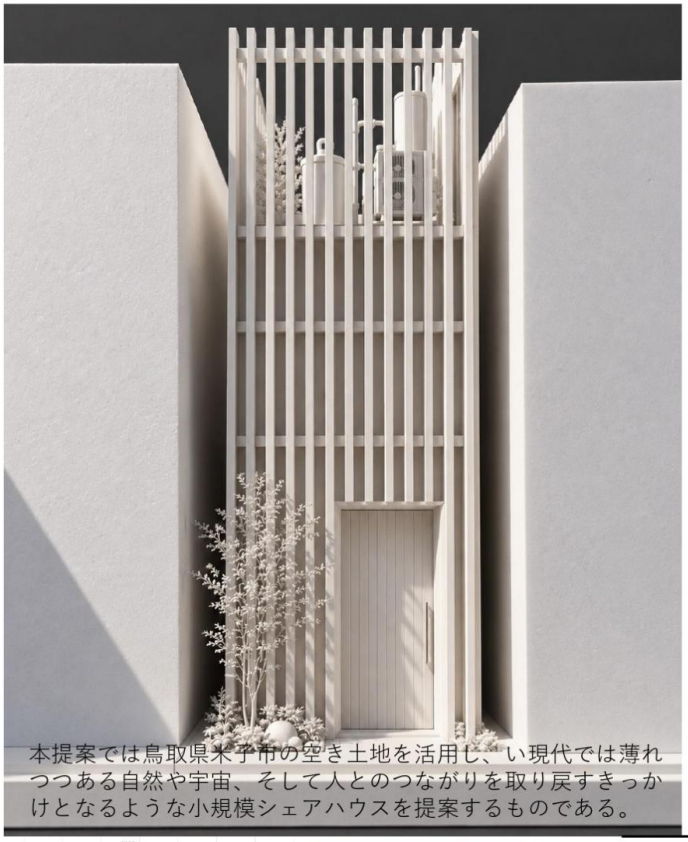
再始
～次元の境界を再構築する～

米子工業高等専門学校 総合工学科 4 年
實近　はるの
仲西　涼
江崎　瑶介
寺﨑　想
高梨　義悠

鳥取県米子市立町二丁目の空き土地に、学生 4 人が暮らす小規模シェアハウスを提案する。かつて商都として栄えた町屋の面影が減少し、高齢化によって建物や暮らしを支える担い手も減る中、若者がかつての暮らしを体験し、次の世代へつなぐ場をつくる。坪庭を介して光・風・音を取り込み、四季の移ろいや人とのつながりを感じる暮らしを実現する。さらに放射空調により、穏やかな室温環境をつくり、自然との関わりを支える。

再始

～次元の境界を再構築する～



本提案では鳥取県米子市の空き土地を活用し、い現代では薄れつつある自然や宇宙、そして人とのつながりを取り戻すきっかけとなるような小規模シェアハウスを提案するものである。

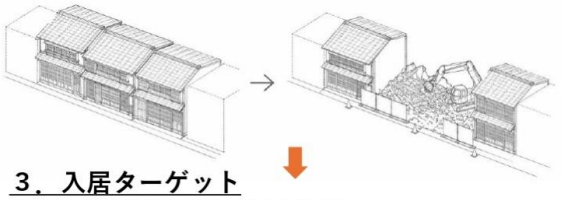
1．対象敷地

鳥取県米子市立町二丁目
かつて「山陰の商都」と呼ばれた町人町。現代でもその面影残る土地。
土地面積　149.09㎡



2．課題

商都であった頃の面影を残ってはいるものの、その数は減少している。また地域の高齢化、管理の難化がみられる。



3．入居ターゲット

かつての暮らしを、次の世代へ

学生4人

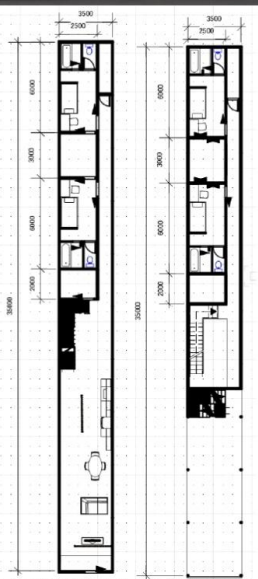
高齢化により、建物や暮らしを支える担い手は減少傾向にある。だからこそ、若者がかつてに近い暮らしを体験し、受け継ぐことが必要だと考える。



4．建物と人と自然のつながり

季節の移ろいを感じる**風**　　時の流れをはかる**光と影**
季節を象徴する**星々**　　夜の静けさを移す**月**
雨の気配を伝える**音**　　木々の成長が刻む**年月**
隣人の暖かさを感じる**庭**　　暮らしの**記憶**

現代では失われつつある、
人や自然や宇宙とのつながりを取り戻す



1階平面

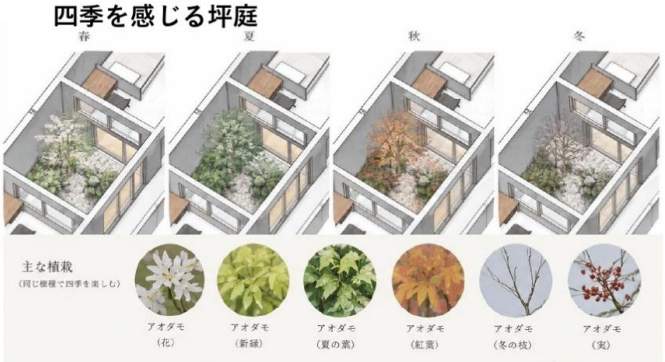
2階平面



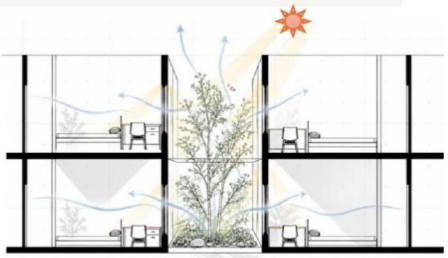
外観イメージ

5．自然と関わる感覚を取り戻す

四季を感じる坪庭



光と風、音を取り込み季節の移ろいを体で感じる。

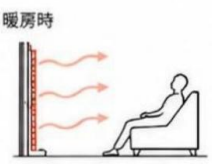


鑑賞だけではなく利用可能な庭にすることで、人とのつながりも促す。



放射空調の効果（イメージ）





壁面からの放射によりドラフト起こさず、穏やかに室温を調節する。
さらに、予想気や気温によって自動調節する機能を持たせることで、季節の移ろいの体感を阻害せず、心地よさをサポートする。

作品番号：11

あいだのメディア

明星大学大学院　建築学研究科　建築学専攻　1 年
石丸　穂高
芳賀　花梨
明星大学 建築学部 建築学科 4 年
佐藤　優斗

従来の壁や天井をカーテンに置き換え、自然と人をゆるやかにつなぐ住まいを提案する。異なる機能を持つカーテンを重ねることで、光・風・音・視線を選択的に調整し、内と外の境界を曖昧にする。9 グリッドを基本とした可変的な空間は、暮らしの変化に柔軟に対応する。時間や季節によって移ろう自然を日常に取り込み、人と環境が呼応する新たな住空間を目指した。

第４回　学生のための環境デザイン設計競技

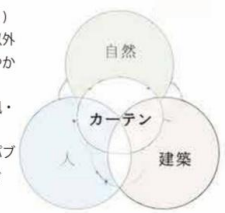
あいだのメディア



カーテンでつくる、新しい壁のかたち。

現代の建築は、箱型の壁によって外の世界を遮断してしまっている。私たちは、壁の役割を「カーテン」に置き換えることで、自然や人の存在を感じながらも、自分の空間をつくることができると考えた。

必要な場所（トイレ、浴室）のみを壁で仕切り、それ以外の空間はカーテンでゆるやかに区切る。
カーテンは、視線・光・風・温度・音などを調整し、内と外、プライベートとパブリック、自然と人をつなぐ媒介となる。



カーテンのバリエーション



防水・遮熱
（夏の強い日射をカット）
（例：遮熱メッシュシート）

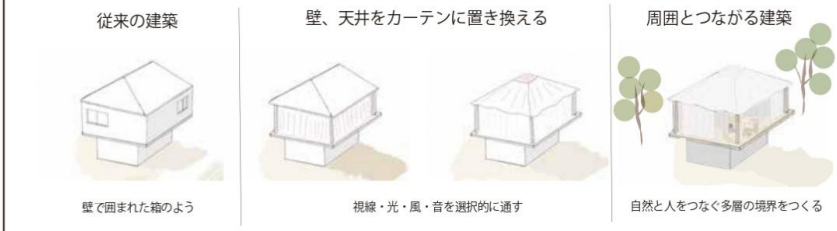


吸音
（室内の反響を抑える）
（例：吸音アコースティックカーテン）

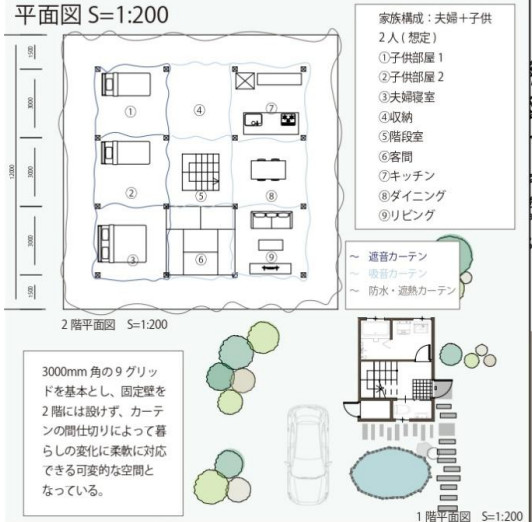


遮音
（外部の騒音を抑える）
（例：多層構造の防音カーテン）

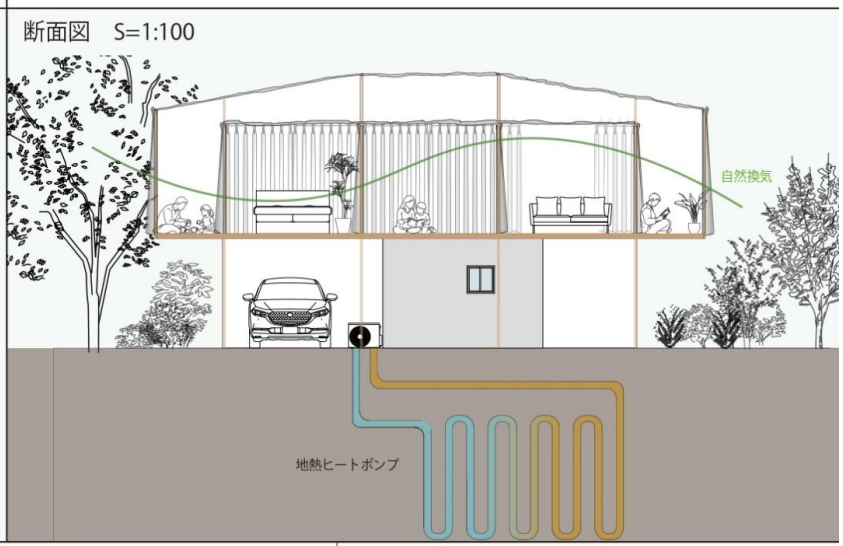
コンセプトダイアグラム



平面図 S=1:200



断面図 S=1:100

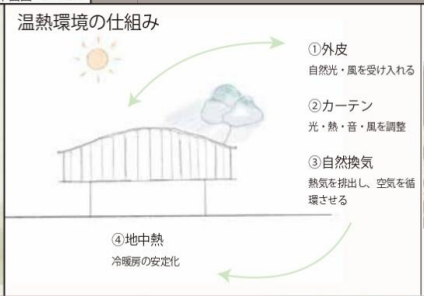


カーテンのレイヤー構成と空間 (2F)



外側のメッシュカーテンは風・鳥の声・街の音を通し、吸音カーテンは室内の反響を抑え、遮音カーテンにより必要な場所だけ閉じる。これにより、室内に音のグラデーションが生まれる。それらを開け閉めすることで異なる空間が交わり、新たな空間へと変化する。カーテンは周囲の環境を調整する「メディア」となる。

温熱環境の仕組み



時間のうつろい

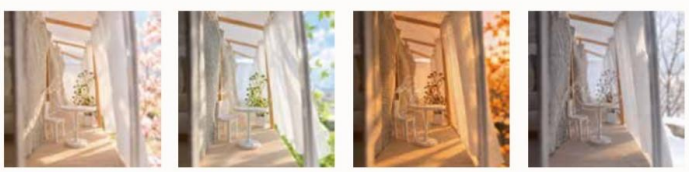


朝
朝日が差し込み、鳥さえずりが聞こえる。

昼
昼下がりの光が、部屋の奥へと溶けていく。

夕方
一日の疲れを癒す、穏やかな夕日。

季節のうつろい



春
麗かな春の日差しが室内にやさしく降り注ぐ。

夏
木漏れ日落ちる夏の日差しと、穏やかな風が室内をめぐる。

秋
黄金色の秋の光が、あたたかい空間を演出する。

冬
澄み切った冬の光が、白いカーテンを透かして床一面に影を描く。

模型写真



作品番号：14

相生（あいおい）

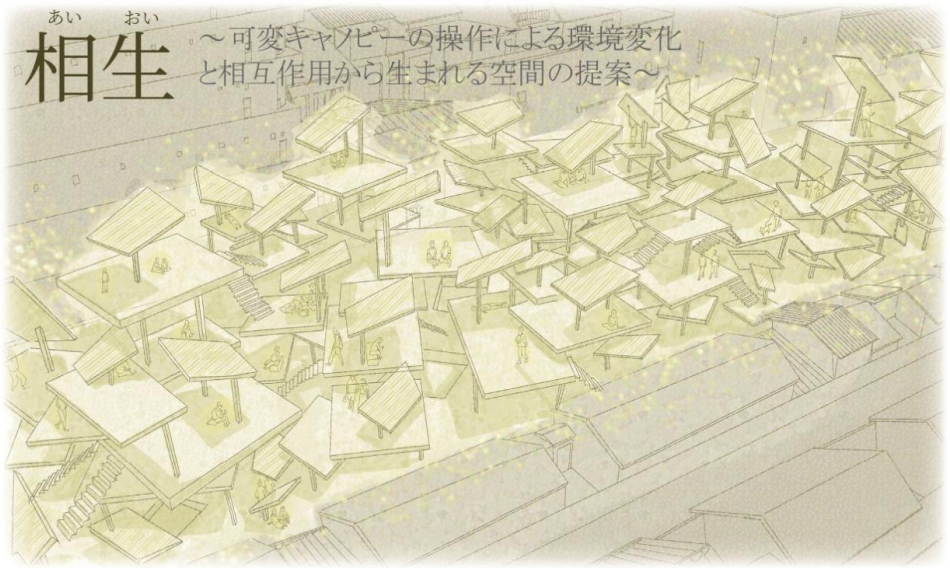
可動キャノピーの操作による環境変化と、相互作用から生まれる空間の提案

東北大学 工学部 建築学科 3 年
Taing Bunlim
神谷 真大

多くの人々が行き交う仙台市のアーケード街。ものが溢れ、情報化が進むこの地で、人々は何を見るのか。駐車場が数多く点在し、滞留空間が不足する仙台駅周辺において、人々が光、風、気温、雨、時間の変化を身体で読み取り、その時々の環境に応じて自らの居場所や過ごし方を変化させていく建築を提案する。可動キャノピーとスキップフロアが生み出す多様な空間は人々の行為によって変化し、重なり合うことで建築全体を構成する。

相生（あいおい）

～可変キャノピーの操作による環境変化と相互作用から生まれる空間の提案～



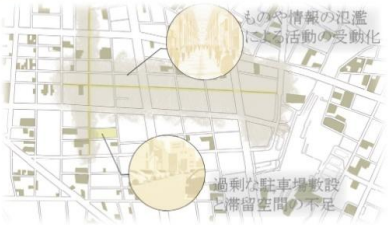
1. アーケードの現状と対象敷地

敷地は宮城県仙台市の仙台駅西側に拡がるアーケードの一角に位置する駐車場である



店舗の老朽化や空き店舗が目立ち、歩行者数も少ない

2. 都市のゆとり・滞留空間の構築



ものや情報の氾濫による活動の受動化

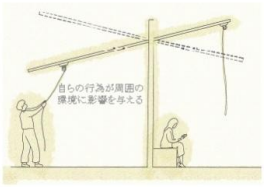
過剰な駐車場敷設と滞留空間の不足

➡ アーケードに隣接する滞留空間の提案

3. 選べる環境、変わる居場所

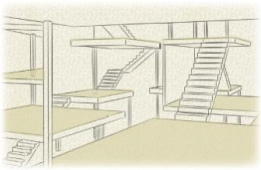
01｜可動キャノピー

壁を貫通するキャノピーを設け、先端部に取り付けワイヤーによって、伸縮・傾斜を操作する。一方のキャノピーを引き出すと、反対側のキャノピーが引き込まれ、隣接する居場所の光、風、雨、開放性が変化する



02｜スキップフロア

ずらし、重ねることで立体的で豊かな空間をつくり出す。これにより光、風、視線、音などの環境が変化し、人々はその時々の身体感覚に応じて、自らの居場所を選択する。異なる高さや距離が生まれることで、多様な過ごし方が広がっていく



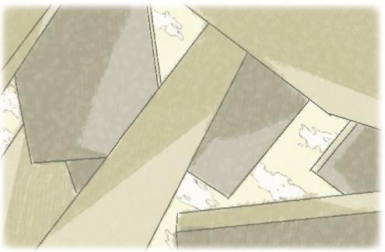
4. 環境応答を促す平面

様々な大きさ・レベルの四角形を重ね合わせて立体空間を構築する。周囲の壁や天井によって切り取られた光、風、雨、温度、時間の変化を身体で知覚し、環境や他者の屋根操作に応じて、自らの居場所や過ごし方を選択する





時間・季節の変化とともに過ごす



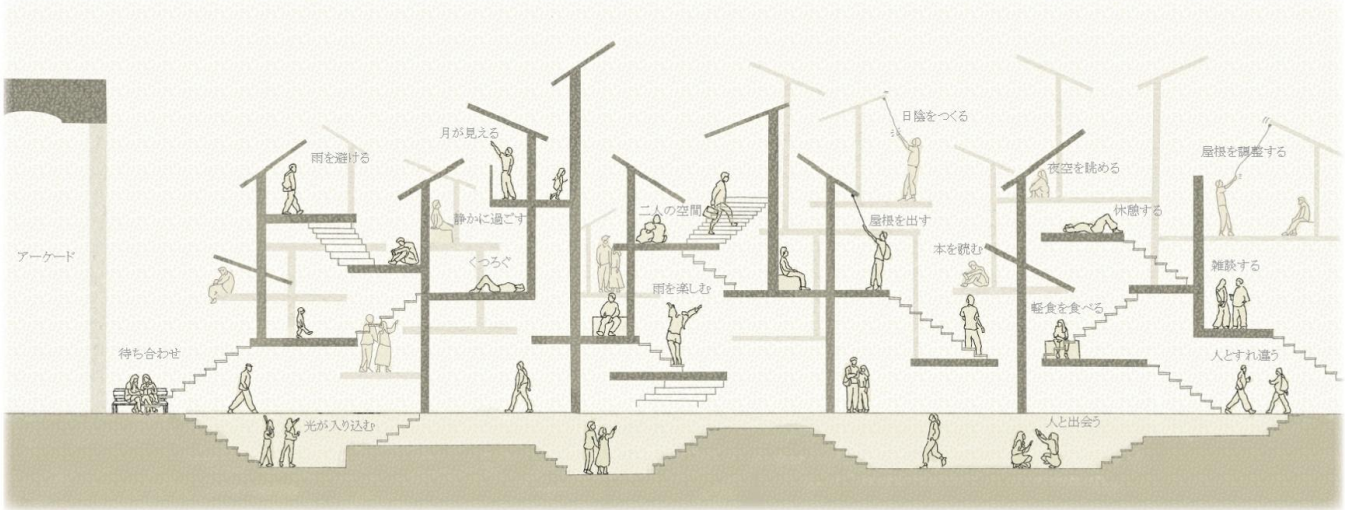
柱や屋根によって空が切り取られる



雨を読み、屋根を操作して適応する



可変キャノピーの操作は連鎖的に人の行為を生み出す。これらが重なり合うことで建築全体を構成する



作品番号：15

窓際で季を編む
～季節に呼応する暮らし～

工学院大学 建築学部 建築学科 ３年
高嶋 郁実
平栗 楓真

自然や宇宙と直接の交信が失われているという課題に対して、窓際に季節に応じた居場所を用意する住宅を提案する。

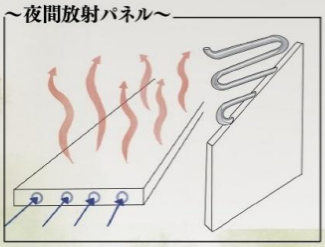
生活動線で自然の変化や太陽・月の運行が目に入り、肌で感じられる工夫をした。季節ごとに環境が心地よい空間を作り出し、それに呼応して居場所を移す。自然の変化を受信して生活スタイルを変えることを交信とみなし、それを促すことを目的とする。都会で生活しながらも自然・宇宙を感じる暮らしを実現させる。

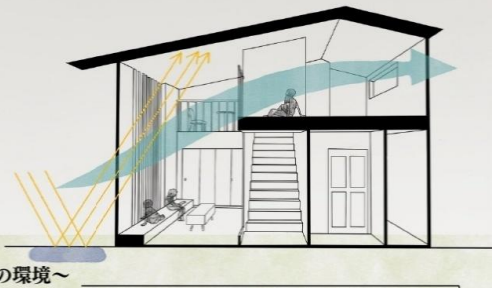
窓際で季(とき)を編む～季節に呼応する暮らし～

高嶋 郁実　平栗 楓真

昔は、自然の変化や太陽や月の運行などの観察から情報を得ていた。宇宙と交信することを通じて、四季を知り、生活の糧を得て環境から身を守って生命をつないできた。一方、情報のあふれた現代においては、直接の交信のほとんどが失われている。
我々はこの課題に対して、窓際に季節に応じた居場所を用意する住宅を提案する。季節ごとに環境が人にとって心地よい空間を作り出し、それに呼応して居場所を移す。生活スタイルを変えることを交信とみなし、それを促すことを目的とする。







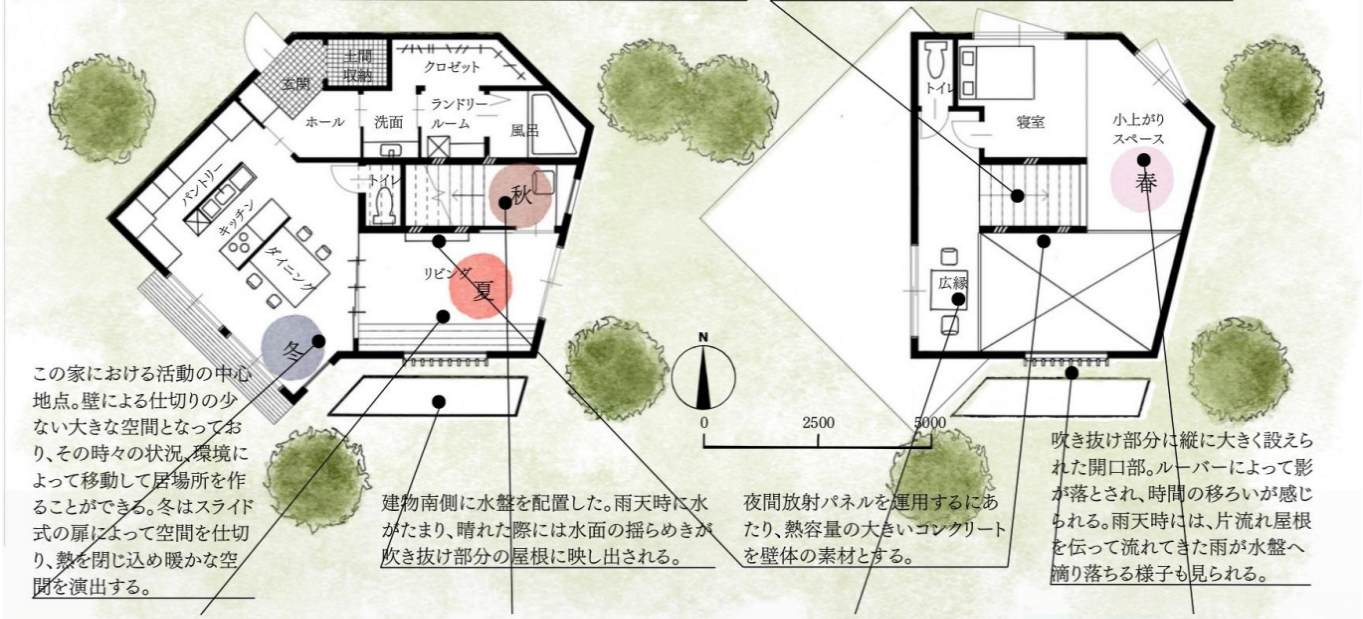
～夜間放射による宇宙との熱交換～

熱を介して宇宙とのつながりを実現するため、我々は「夜間放射パネル」を提案する。
夜間放射パネルとは、夜間に宇宙空間へ熱が逃げる放射冷却を利用し、パネル内の液体を冷やすというものである。冷えた液体が建物の内壁に配管された冷水パイプを流れ、壁を冷却する。温度が下がった壁により、居室を冷やすことができる。そして温度が高くなった液体は再度パネル内部を通り、冷やされてから循環するという仕組みである。屋根にパネルを設置し、階段に接する2枚の内壁に冷水パイプを配管する。また夏だけではなく、冬には昼間に運転し、太陽熱集熱を行う。温められた液体は内壁から部屋を温める。宇宙からエネルギーを受け取ることで、より省エネでより快適な住宅が実現する。

～建築内部の環境～

壁の少ない広い空間は、南北方向の風を受け流し自然換気を促す。南からの日光は、水盤に反射し室内に柔らかく差し込む。夏季は2階を熱的バッファーゾーンと捉え、1階部分に快適な環境を造り出す。

ボリュームの中心に位置する階段。階段上部は天窓になっており、光が降り注ぐ。夜に寝室へ行くために階段を上る際には夜空が広がり、月明かりが差し込む。動線と居場所とを兼ねた空間である。

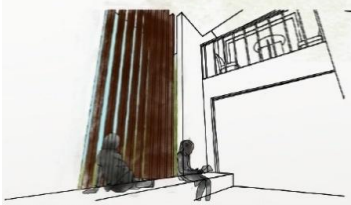


この家における活動の中心地点。壁による仕切りの少ない大きな空間となっており、その時々の状況、環境によって移動して居場所を作ることができる。冬はスライド式の扉によって空間を仕切り、熱を閉じ込め暖かな空間を演出する。

建物南側に水盤を配置した。雨天時に水がたまり、晴れた際には水面の揺らめきが吹き抜け部分の屋根に映し出される。

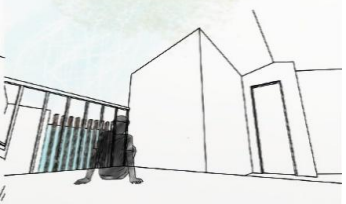
夜間放射パネルを運用するにあたり、熱容量の大きいコンクリートを壁体の素材とする。

吹き抜け部分に縦に大きく設えられた開口部。ルーバーによって影が落とされ、時間の移ろいが感じられる。雨天時には、片流れ屋根を伝って流れてきた雨が水盤へ滴り落ちる様子も見られる。


夏のリビング

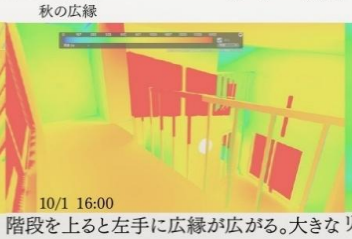

秋の階段


秋の広縁


春の小上がり









窓際に小上がりの台を配置し、ただの開口ではなく、居場所としての窓際を提供する。垂直ルーバーによって直射光を遮り、2階空間がバッファーとなる、居心地の良い涼しげなリビングになるよう設計した。

朝起きて必ず通る階段下に窓を設置。生活動線の中に自然を享受できるように設計した。また、東側を向いた開口からは中秋の名月を望むことができ、静かな空間でしんみりと鑑賞することもできる。

階段を上ると左手に広縁が広がる。大きな開口部と吹き抜けとで挟まれたこの空間は、読書・書斎スペースとして集中できる居場所である。西日でリビングを照らすとともに屋根を流れる雨水を間近で感じる。

リビングと吹き抜けでつながりながらも他の場所よりも照度が低く、リラックスできる秘密基地のような居場所。正面に見える吹き抜け部分の天井には水盤で反射した光が水面を写し、夏が感じられる。

作品番号：16

10 分/3 億 5000 万年
自然の時間に、身体を順応させる建築

山口大学大学院 創成科学研究科 建設環境系専攻 1 年
梅津 歩実
冨田 航成
谷田 みのり
吉松 麗

ショート動画や SNS など、絶えず更新される「速い情報」で溢れる現代社会。その中で我々は、情報の取捨選択に追われ、与えられた情報を受け取ることを当たり前としている。そこで、地球の「遅い情報」を体感できる鍾乳洞に注目し、地上から鍾乳洞へ至る経路の光と温度を段階的に調整し、暗順応と熱順応を促す「人間が地球の本来の姿に寄り添う建築」を提案する。また、順応することで洞内照明を抑え、洞窟本来の生態系を取り戻す。

10分/3.5億万年

自然の時間に身体を順応させる建築

10 MIN / 350 MILLION YEARS



01 | 背景　速い情報に囲まれた現代

現代社会は、絶えず更新される「速い情報」で溢れている。私たちは膨大な情報に囲まれ、いつしか与えられたものを受け取るだけになった。しかし本来、人は自然の変化を身体で感じ、時間や季節を捉えて暮らしてきた。今必要なのは、情報を追うことではなく、自然の中にある「遅い情報」に目を向け、自ら感じ、考えることではないだろうか。



02 | 対象敷地　照明植栽による鍾乳洞内の生態系の危機

対象敷地：山口県美祢市秋芳洞黒谷洞入口

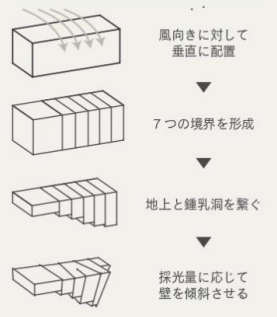
秋芳洞は日本最大級の鍾乳洞であり、数億年という時間をかけて形成された。鍾乳石や地下水によって刻まれた地形を通し、人間の時間感覚をはるかに超えた地球の「遅い情報」を体感できる。その一方、観光のために設置された照明によってコケ類が繁殖し、洞窟本来の生態系に影響を与えているという課題も抱えている。

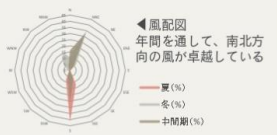


03 | コンセプト　感覚を自然の速度に順応させる

地上から鍾乳洞へ至る経路の光と温度を段階的に調整し、暗順応と熱順応を促すことで、速い時間に慣れた身体を自然の時間へと切り替えていく。環境を変えるのではなく、人間の身体の感覚を自然の速度に順応させるジオミュージアムを提案する。

04 | ダイアグラム　7枚の境界





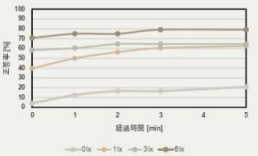
◀風配図
年間を通して、南北方向の風が卓越している

05 | 提案　感覚を自然の速度にするための暗順応と熱順応

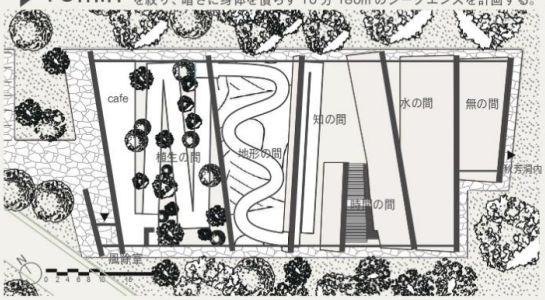
①光に順応する暗順応

実験：
低照度環境における視認性の変化を検証した。

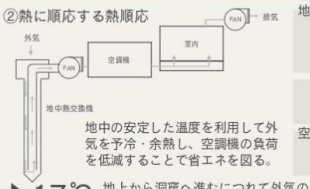
知見：
1～6lxでは時間の経過とともに正答率が上昇し、特に開始から約3分間で大きな変化がみられた。一方、0lxでは視認性の回復は限定的であった。



▶10min　完全な暗闇をつくるのではなくわずかな光を残しながら段階的に光量を絞り、暗さに身体を慣らす10分180mのシークエンスを計画する。



②熱に順応する熱順応



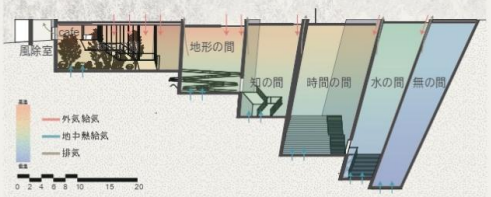
地中の安定した温度を利用して外気を予冷・余熱し、空調機の負荷を低減することで省エネを図る。

地中深くの温度
天気、気温変化の影響：小さい
夏：外気温より低い
冬：外気温より高い

夏：外気が冷される
冬：外気が温められる

空調機
処理する外気負荷が低減
→消費電力の削減

▶17℃　地上から洞窟へ進むにつれて外気の影響を抑え、年間約17℃の地中環境へ近づける。空間高さを増して上部に暖気を滞留・排出させ、温度成層によって人のいる領域を段階的に冷却する。



08 | パース　地上から洞窟へ

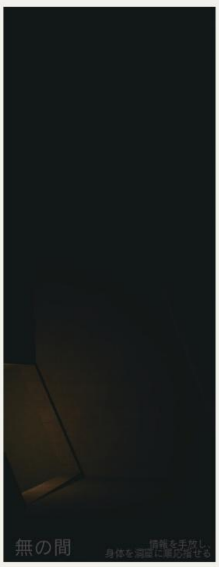












環境・設備デザイン賞「第 4 回学生のための環境デザイン設計競技」2026

「自然や宇宙と交信する建築」

作品番号：18

倉吉市本庁舎増改築計画

～暮らしよい倉吉を目指して～

関西学院大学大学院 理工学研究科 建築学専攻 1 年

立石 聡一郎

戦後モダニズム建築である倉吉市本庁舎の RC 架構を継承しながら、既存躯体の蓄熱を環境資源として再解釈する計画。中庭のアトリウム化とチムニーシステムにより立体的な自然換気・排熱経路を形成し、地域の石州瓦を用いたスクリーンによって日射を遮蔽するとともに、通風と打ち水による冷却を促す。減築と増築を通して既存建築に新たな環境性能と市民への開放性を与え、歴史的価値の継承と脱炭素化を両立する市庁舎を提案する。

倉吉市本庁舎増改築計画　暮らしよい倉吉を目指して

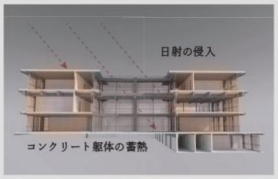
01 倉吉市本庁舎の継承と環境再生



戦後モダニズムの象徴である RC 打放しの架構と骨格を尊重しつつ、現代の市庁舎に求められる環境性能と市民への開放性を付加。既存躯体の持つ高い熱容量を再評価し、地域気候に最適化したパッシブデザインを組み込むことで、歴史的価値の継承と脱炭素社会の実現を両立させる。

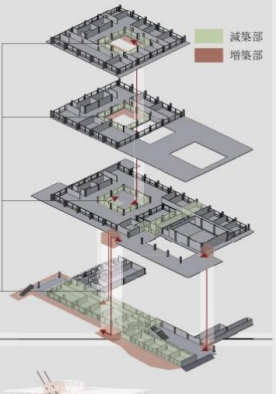
02 ブルータリズム建築の増改築

【課題】RC 躯体の蓄熱障害と室内環境



既存の RC 躯体は高い熱容量を持つが、夏期は日射熱を溜め込み、室内へ輻射熱を放出し続ける。この「蓄熱障害」が室内環境の快適性を害している。

【操作】減築・増築による環境再編



一階を一部減築しピロティ化、
中庭を内部化し、垂直動線を設ける。

03 パッシブ手法 I

【操作】チムニーシステムの構築

・吹き抜けの内部化と垂直コアによる自然換気パスの創出
・流体解析に基づく立体通風計画



中庭のアトリウム化と既存スラブの改修により、
建物中央に巨大な上昇気流の通過ルートを形成する。

【原理】チムニー効果のメカニズム



室内上下の温度差および上部開口部からの自然排熱により絶え間なく換気気流を発生させる。

【効果】夏季の換気効果 / 冬季のアトリウム効果



コンクリート躯体に蓄積された熱を排出し、冷房負荷を軽減する。

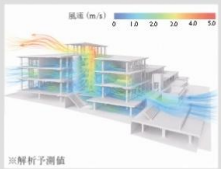


中庭のアトリウムが集熱体として機能し、暖房負荷を抑制する。

・通風（風速分布）

低層部のピロティや開口部から引き込まれた外気が、中央のアトリウムを経由して各階の執務空間へ拡散。

浮力と風圧によって吹き抜け頂部へとスムーズに通り抜ける。

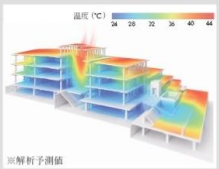


※解析予測値

・排熱（温度分布）

日射や室内発熱によって温められた空気がアトリウム上部に集約され、重力換気によって屋外へ排出される。

各階の熱滞留が解消され、室内温度が平準化される。



※解析予測値

04 パッシブ手法 II

【操作】石州瓦による環境ファサードの構築

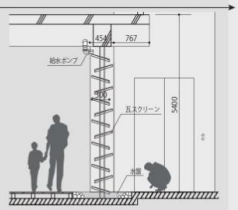
・石州瓦を再解釈した透かし積みスクリーンの配置
・日射遮蔽と風・打ち水効果のコントロール



【原理】瓦スクリーンのメカニズム

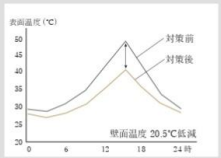


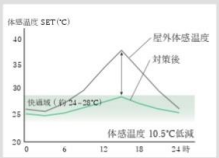
地域の石州瓦をルーバー状に配置し、直射日光を遮蔽しつつ、隙間を抜ける心地よい風と柔らかな光を取り込む。



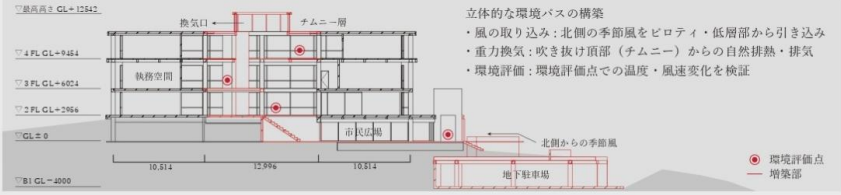
【効果】ファサードの熱特性と体感温度の評価

スクリーン設置後の室内壁面の温度比較　　体感温度の削減効果





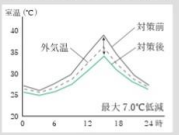
05 建築空間と一体化した環境性能評価



立体的な環境パスの構築
・風の取り込み：北側の季節風をピロティ・低層部から引き込み
・重力換気：吹き抜け頂部（チムニー）からの自然排熱・排気
・環境評価：環境評価点での温度・風速変化を検証

環境評価点
増築部

【SCENE 01】4 F 中庭上部空間 （パッシブ手法 I）

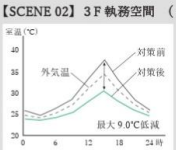




チムニー層が上昇気流を引き抜く排熱のコアとして機能する。



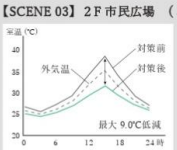
【SCENE 02】3 F 執務空間 （パッシブ手法 I）





熱のこもりを防ぎ昼夜を通して涼しい執務環境を創出する。

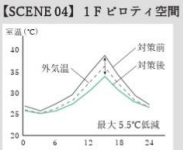
【SCENE 03】2 F 市民広場 （パッシブ手法 I）





温室効果と自然通風を制御し、市民の多様な活動や交流を包み込む。

【SCENE 04】1 F ピロティ空間 （パッシブ手法 II）





スクリーンの日射遮蔽と打ち水効果により、涼しい広場を形成する。

作品番号：19

海の子
―防潮堤が隔てる海とまちの再編―

東北大学　工学部　建築・社会環境工学科　3 年
向出　智絵

東日本大震災を経て、東北地方沿岸部には長大な防潮堤が築かれた。これにより生活の安全性が高まった一方で、生命の源である海との大きな隔たりが生じてしまった。潮の干満や波の変化が単なるデータとして処理される現代において、改めて身体レベルでその変化を感じ取り、海にふれ、知るきっかけとなる建築を提案する。人々が長い時間をかけ見つけてきた地域固有の海の性格やそこから生まれた営みを、朝市を通して受け継いでいく。

海の子 —防潮堤が隔てる海とまちの再編—



東日本大震災を経て、東北地方沿岸部には長大な防潮堤が築かれた。これにより生活の安全性が高まった一方で、生命の源である海との大きな隔たりが生じてしまった。潮の干満や波の変化が単なるデータとして処理される現代において、改めて身体レベルでその変化を感じ取り、海にふれ、知るきっかけとなる建築を提案する。人々が長い時間をかけ見つけてきた地域固有の海の性格やそこから生まれた営みを、朝市を通して受け継いでいく。

1. 敷地 —防潮堤に隔たれた、舟と魚のまちと海—

対象敷地は宮城県名取市にあるゆりあげ港朝市である。この地域は古くから海や川との繋がりが強く、釣りや水運が盛んであった。東日本大震災では大きな津波被害を受けたものの、震災のわずか16日後に復活し、その後の地域全体の復興に向けた希望の光となった。現在も毎週日曜には各地から多くの人々が集い賑わいを見せる。しかし、平成29年に築かれた防潮堤によって、海とまちは隔たれ、人々は海との直接的な関わりを失ってしまった。

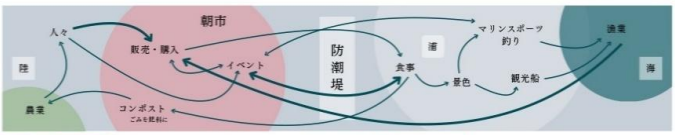




2. 問題提起 —未知が引き起こす、海と共生する文化の喪失—



3. 提案 —防潮堤を乗り越え、海とまちを強固につなぐ—



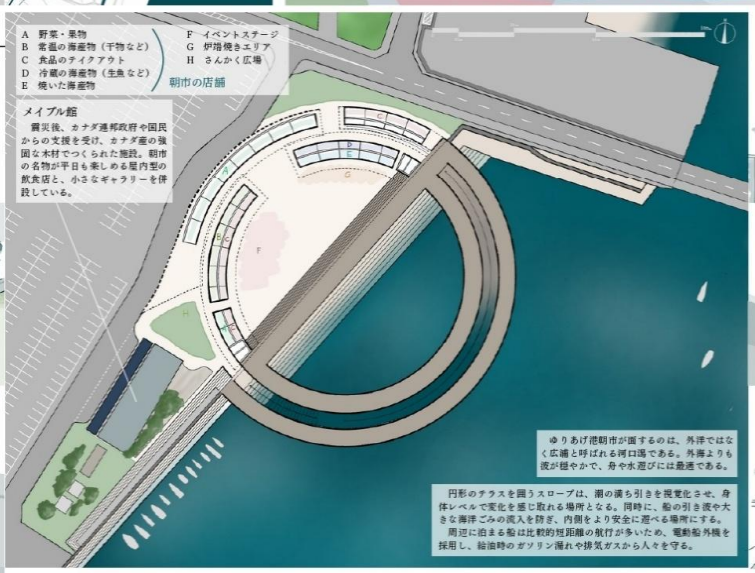
4. 計画 —活動のなかに「海」を組み込む—

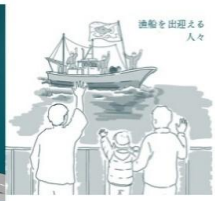
階段やスロープを用いて防潮堤を乗り越え、自然な活動の中で海と朝市を行き来し興味や知識を高める建築を提案する。われわれ人間は大昔から海で育まれた生命を頂いてきたが、分業化し効率化された現代の社会では、それらは単なる消費物に過ぎず、魚や貝のこと、その獲り方、それらが居る海のことをよく知らない。朝市は「海でとれたものを持ち寄り皆で調理して食べる」という原始的な活動と結びつく。この活動を通して人々、殊に子どもたちの海への興味・関心を引き出す。









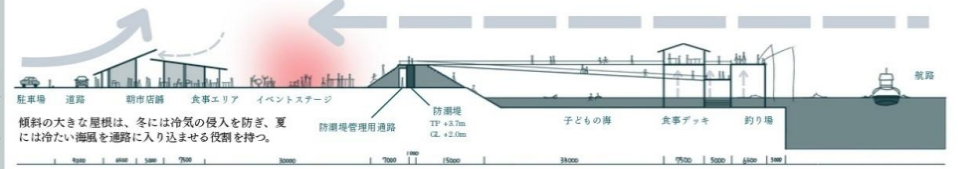






〈風の傾向〉
6～9月：海上と陸上での気温差により南東から吹く海風。2.5～3.0 m/s。
10～5月：山脈のある北西方向から吹く風。3.0～4.5 m/s。

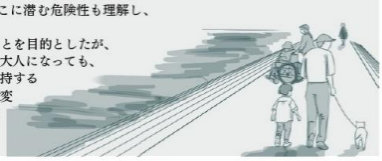
夏は海の気化熱により、比較的温度が下がる海上のデッキで食事をすることができる。さらに、その空気が海から陸に向かって運ばれ、人々が集まる場所を冷やす。冬は北西の建物が強い冷気をさえぎり、炉端焼きで温度が高くなった空気は防潮堤によってとどめられ、人々を温める。





5. 展望 —朝市の文化とともに引き継がれる建築—

自然は時に脅威であるが、多くの恵みをもたらし、それが人々をつなぐ。
海を一方的に恐れるのではなく、知ることでそこに潜む危険性も理解し、向き合っていくことが重要である。
本計画では朝市を通して海へ興味を持たせることを目的としたが、老若男女問わず居心地の良い環境にすることで、大人になっても、年をとっても、何度も訪れたいと思える建築を維持する必要がある。海のそばで潮風にさらされ管理は大変だが、ここで遊んだ子どもが成長し、朝市という文化とともに引き継いでいくことを期待する。



作品番号：20

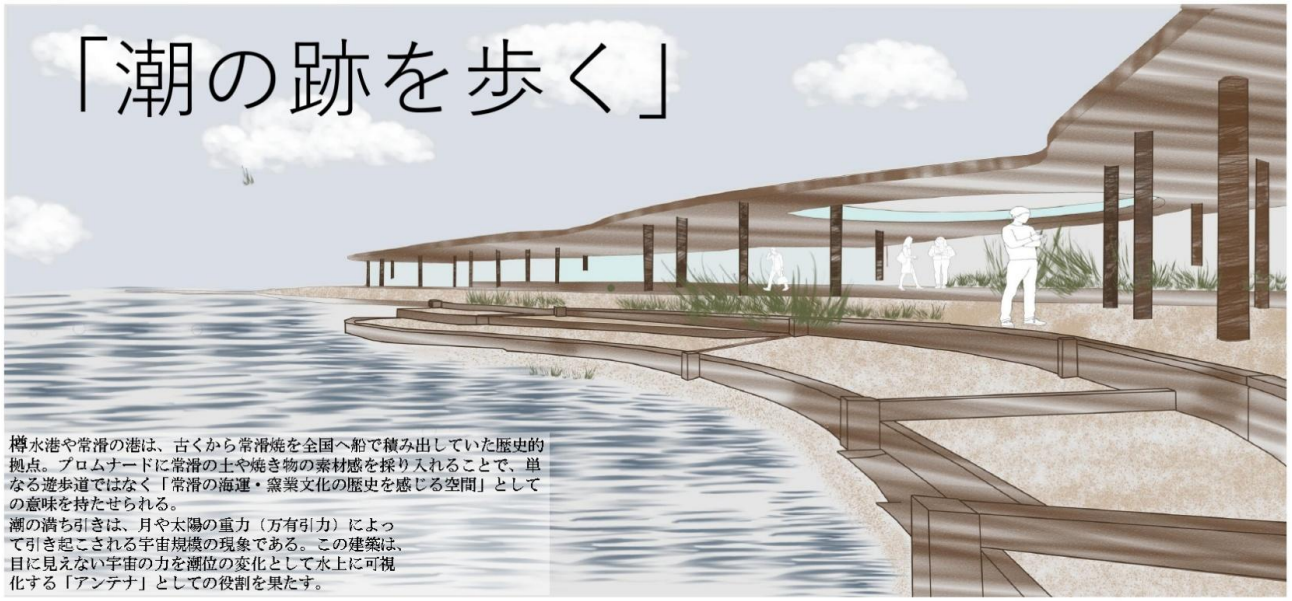
「潮の跡を歩く」

中部大学　工学部 建築学科 3 年
眞瀬　新一

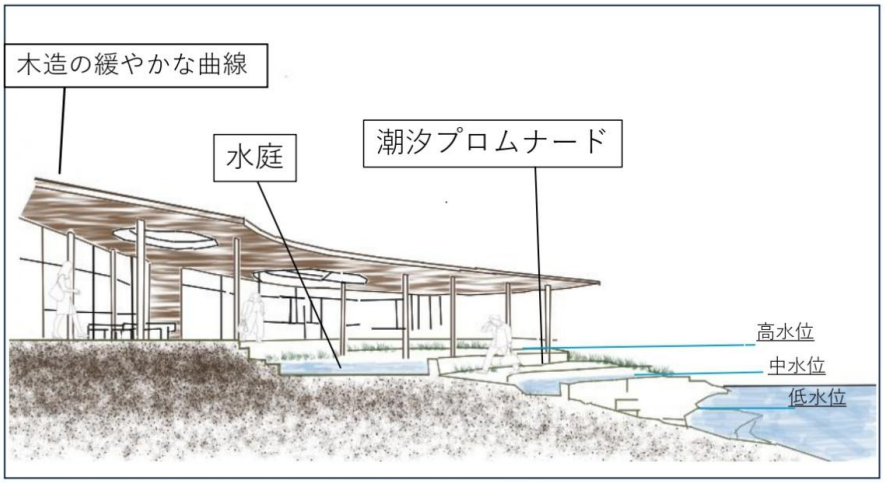
中部大学　工学部 建築学科 1 年
高木　星邑

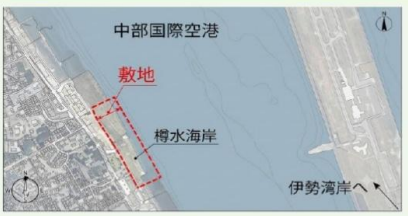
潮の満ち引きは、月や太陽の重力によって生じる宇宙規模の現象である。本計画では、常滑市樽水海岸に、潮位によって歩ける場所が変化する「潮汐プロムナード」を提案する。干潮時には海へ近づく低い道が現れ、満潮時には水に沈み、人は高いデッキへ移動する。刻々と変化する潮位を身体で感じることで、海と月、そして人をつなぎ、目に見えない宇宙の力と交信する建築を目指した。

「潮の跡を歩く」



樽水港や常滑の港は、古くから常滑焼を全国へ船で積み出していた歴史的拠点。プロムナードに常滑の土や焼き物の素材感を採り入れることで、単なる遊歩道ではなく「常滑の海運・窯業文化の歴史を感じる空間」としての意味を持たせられる。
潮の満ち引きは、月や太陽の重力（万有引力）によって引き起こされる宇宙規模の現象である。この建築は、目に見えない宇宙の力を潮位の変化として水上に可視化する「アンテナ」としての役割を果たす。





場所：常滑市樽水海岸

中部国際空港を望む浅瀬の海岸。干潮時には広い干潟が現れ、満潮時には穏やかな海が建築の足元に満ちる。昔も今も人々が潮と共に生きてきた場所。
満潮時には建築の一部が海に沈み、干潮時には広大な架構が姿を現す。地球の都合ではなく宇宙のサイクルに従って人の居場所が変化する、宇宙と調和した建築体験を生み出す。

海に浮かぶ干潟回廊

周辺の海岸は広大な浅瀬・干潟状の環境が広がり、潮の満ち引きが比較的大きいエリアである。満潮時には海に浮かぶ回廊となり、干潮時には磯や浅瀬の生態系に近づける臨場感ある歩行体験が出来る。



飛行機と夕陽が織りなす絶景

伊勢湾を臨む開けたロケーションであり、夕日(サンセット)の名所としても優れている。飛行機の離発着や対岸のシルエット、夕陽と潮の満ち引きが重なる「絶景のフォトスポット」となる。



干潟・磯の生き物観察

潮が引くことで現れるカニやハゼ、貝類、海藻などの海洋生物を間近で観察・触れ合える場所として活用できる。



一日の中で変化する風景と建築の使われ方

干潮
9:00



潮が引き、プロムナードの低い道が現れる。
海に近づき、干潮を歩くことができる。

満ちていく
12:00



水が満ちてきて、歩ける場所が変わる。
人は少し高いデッキへと移動していく。

満潮
15:00



潮が満ち、低い道は海の下。
静かな水面が建築に寄り潤う。

引き始める
18:00



潮が引き始め、また新しい潮が現れる。
一日のリズムを身体で感じる。

作品番号：21

Monochrome Choreography

神戸大学大学院 工学研究科建築学専攻 M1 年
小田 悠汰
玖村 直哉
田中 良征
松嶋 祐希

現代、太陽は紫外線や酷暑の元とされる一方、かつて人々は日向や木陰を選び、太陽とともに暮らしてきた。そこで、神戸フェリーターミナル前に、日射に応じて自律的に変形するサーモバイメタルの屋根を挿入する。金属の厚みを変化させ、温度による変形量を調整し、夏には影を、冬には光を生み出す。「光／影の路」は、通る人の動線と、待つ人の居場所を天候や時間に応じて変化させ、自然と交信する豊かな時間を生み出す。

Monochrome Choreography



課題 むやみに太陽を遮断する現代

現代における太陽は、紫外線や酷暑をもたらすものとして、遮るべき対象とされている。

しかし本来、私たちは、太陽の恵みを積極的に取り入れ、一日を豊かに暮らしてきた。晴れた日には木漏れ日の揺らめきを眺め、曇りの日には柔らかな光の中で過ごし、夏は木陰で涼み、冬は日向で団欒する。

太陽を一律に遮るのではなく、時間の移ろいや季節を感じながら、快適に過ごせる場を設計できないだろうか。

素材 日射しに呼応する素材「サーモバイメタル」

膨張率の異なる金属を貼り合わせた合金。日射量が高く蓄熱すると膨張率の違いによってメタルが変形する。一方で曇って日射量が低くなると、放熱されてメタルが元の形状に戻る。



敷地 神戸三宮フェリーターミナル前

Umie とメリケンパークを繋ぐ道で人が雑多に通るが、日除けが全くなく、夏になると非常に暑い。フェリーの待合室も光が強く入り熱環境負荷が考えられる。この敷地にサーモバイメタルの屋根を挿入することで、快適な光の環境をつくり、通る時も待つ時も光を楽しむ空間を設計する。

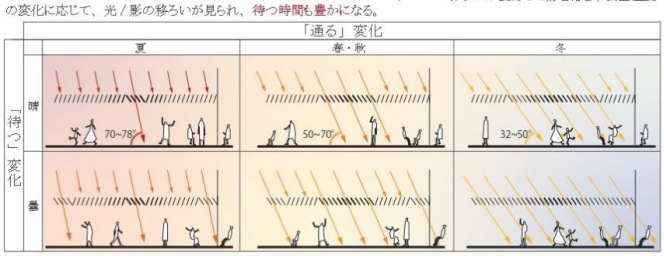


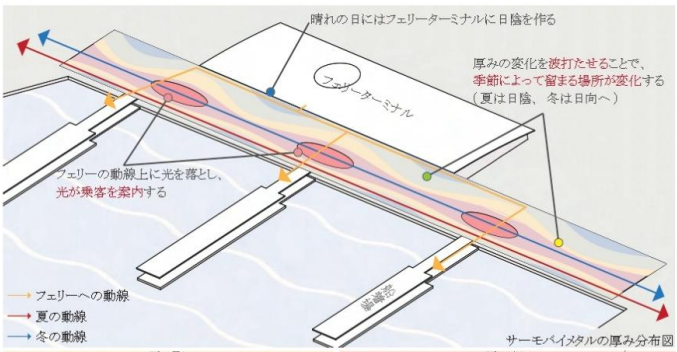
提案 メタルの厚みを変化させ、季節や天気に応じた光 / 影を振り付ける

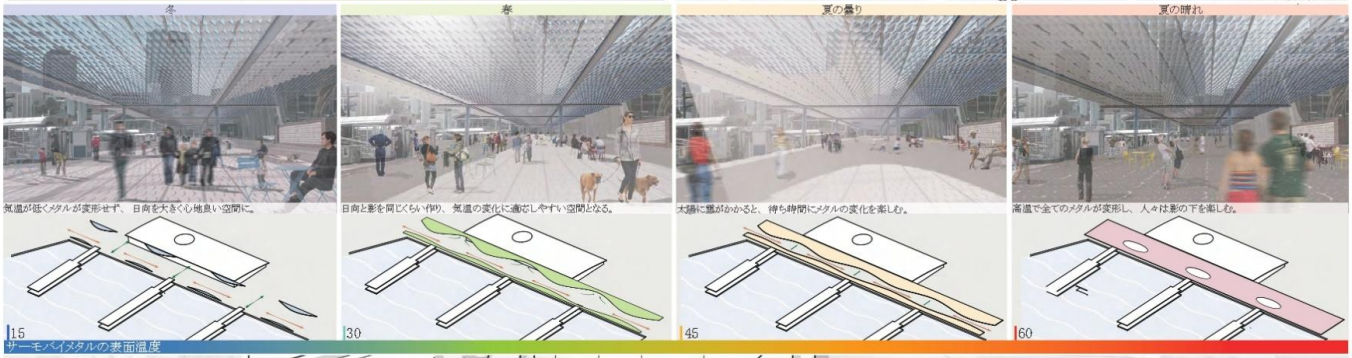
メタルの厚みを変化させることで、温度に対する反応に差をつけ、暑いほど日陰が広がり、寒いほど日向が広がる。雑多な人の通り道を、光 / 影の路にすることで、季節に応じた動線を作る。夏は影を歩き、冬は日だまりを歩く。さらに、晴れから曇りなど、時間による日射量の変化に応じて、光 / 影の移ろいが見られ、待つ時間も豊かになる。

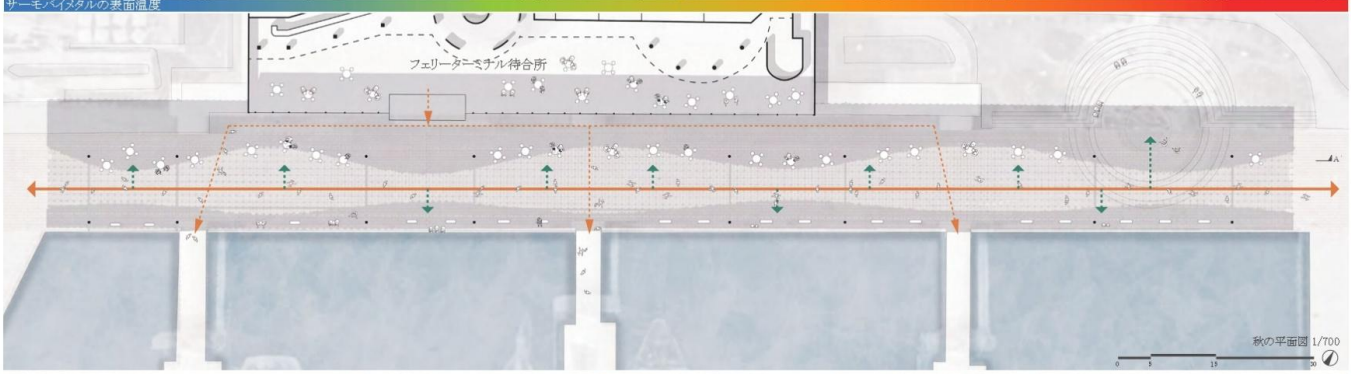


サーモバイメタルが変形して影を落とす表面温度











作品番号：24

宇宙とつながる
～七沢森林公園の星形キャンプ場～

東京工芸大学 工学部 工学科 2 年
高橋 小梅
北島 萌
市川琴子

神奈川県厚木市にある広大な七沢森林公園の一角に、周囲の植生環境を取り込んだ「多面的キャンプ場」を提案する。災害対策、斜面の利用、地上絵的ロマンを盛り込み、公園内部だけでなく、周辺地域一帯とつながるグランピングやオートキャンプ施設を計画する。太陽の軌道と風を利用し、かつての石造りの住環境を彷彿とさせる神秘的な建築は、はるか昔の光を放つ星空と呼応する。夜にはテントの灯りが銀河の星々のように森に浮かび、自然と建築が織りなす幻想的な風景を生み出す。



宇宙とつながる

～七沢森林公園の星形キャンプ場～



01自然環境と共存する

災害時、近隣の小中学校への避難をためらう人たち（障がいのある方のいる家族、ペット連れ、乳幼児の多い家庭など）が安心して避難でき情報共有や食糧支援が円滑に行えるよう、小中学校に挟まれた場所に位置している。また、周辺に大きな川がなく洪水の心配も少ないため、二次避難所としても利用可能。



02 四季を感じる平面計画

施設全体は星をかたどった形となっており、航空写真では地上絵のように見えることを狙っている。夜にはライトアップと、それぞれのテントから漏れるランプや携帯の明かりが、大きな星の形の中に銀河のような空間をつくり出すだろう。

空に浮かぶ星々の光は、何光年も前の過去から届いた光である。だからこそ、私たちがつくる小さな銀河の光が、いつか遠い未来に宇宙から観測されることを願っている。









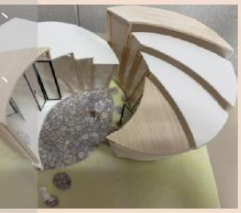


最上階のテラスでは滝に触れながら食事。



03 自然と呼吸するテント

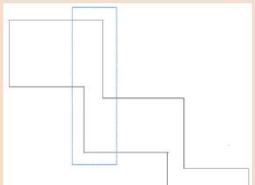
七沢森林公園の風や光、葉や花、星空から着想を得たテント。南西に向け、屋根の高さを段階的に変化させることで、夏と冬の風を取り込み、ほどよい光を生み出す。中央には家族でBBQや食事を楽しめる開けた空間を設け、外からの視線を遮りながら、自然を感じて過ごせる団欒の場とした。







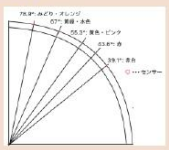
04 今日の光、夜の景色





二つの階をつなぐ吹き抜けによって上下階での空気交換を促す。





太陽高度に合わせてセンサーを５つつける。その日一番日射量を観測したセンサーの色で、夜に建物をライトアップする。また、天井に太陽光パネルを付け、滝の水の循環とライトアップの電力を賄うため、あえて蓄電はせず、その日生み出すことのできる電気だけで動かすことで天気をより視覚的に感じることができる。

元来、公園に生息する四季折々の植物たちが、テントごとの区画を隔てるように生えている。区画同士の距離を離すことで、従来よりも家族内での密接なキャンプ体験を生み出している。

作品番号：25

月奏の森

愛知工業大学　工学部建築学科　4 年
内堀優太

本作は、富士市・竹採公園に伝わるかぐや姫の物語を背景に、現代社会における「情報と記憶」の関係を再考する建築です。月や星、竹、風などの自然を五感で感じることで、その場で得た体験を自身の記憶として残します。その記憶が後に他者へ共有され、新たな興味や再訪を生み出すことで、情報と記憶が循環し続ける場を提案します。

月奏の森

── 記憶をめぐる建築 ──

月を見上げる。
それは、
きっと
はじめての
情報に出会う
瞬間。



コンセプト

今、ここでしか見えない ものを、見にいく。

この建築は、富士市・竹採公園に伝わる
かぐや姫の物語を背景に、現代の情報社会における
「情報と記憶」の関係を再考する建築です。
月や星、竹、風などの自然を五感で感じることで、
その場で得た体験を自身の記憶として残します。
そして、体験を記憶として持ち帰り、
その記憶が後に他者へ共有され、新たな興味や再訪を
生み出すことで、
情報と記憶が循環し続ける場を提案します。
また、記憶を曖昧にし、時間の経過とともに
その価値をより深く感じられるような体験を目指します。

情報の循環

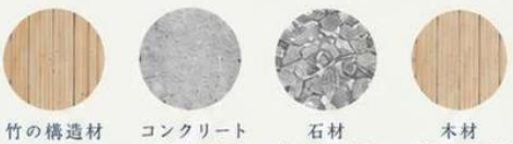


建築のイメージ



竹林に溶け込む
シンプルな構成。
自然の中に浮かぶような
軽やかな屋根が、
人を迎え入れる。

使用する建材





竹の柱と屋根の隙間から
光や風が入り、
自然を感じられる
空間をつくる。

体験のシーン



建築が伝える：情報の循環



建築が生み出す情報

この場所での体験は、
ただの観光ではなく、記憶として持ち帰られ、
そして誰かに伝わることで、
また新たな人を惹きつける。
そうして、情報と記憶は循環し続ける。

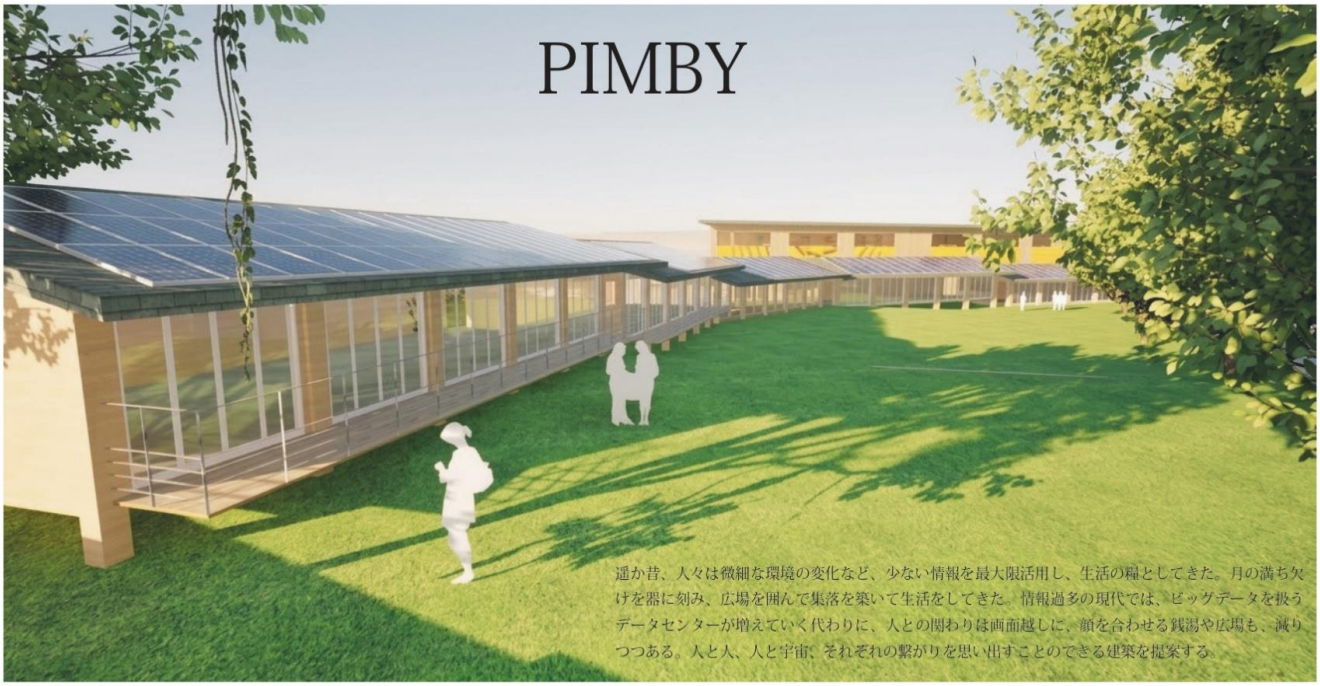
作品番号：26

PIMBY

東京都市大学 建築都市デザイン学部 建築学科 4 年
澤井 悠季
山王 徹人
滝 康太郎
宮本 葵生

はるか昔、人々は空から情報を得ていた。石を並べ、器に刻み、広場を囲んで暮らしていた。周囲を見渡し、宇宙を見上げる。身体そのものが、情報を受け取るアンテナだった。機械が世界を受信する現代で、NIMBY の可能性を抱えるデータセンターが、その演算の熱で、人々がもう一度アンテナとしての身体を取り戻す場所をつくる。データセンターを、「うちの裏に、どうぞ。」そう言える隣人に昇華させる。

PIMBY



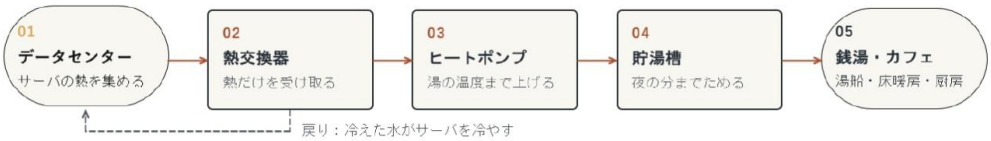
遥か昔、人々は微細な環境の変化など、少ない情報を最大限活用し、生活の糧としてきた。月の満ち欠けを器に刻み、広場を囲んで集落を築いて生活をしてきた。情報過多の現代では、ビッグデータを扱うデータセンターが増えていく代わりに、人との関わりは画面越しに、顔を合わせる銭湯や広場も、減りつつある。人と人、人と宇宙、それぞれの繋がりを思い出すことのできる建築を提案する。

問い

近年、生成 AI の普及やクラウドサービスの拡大により、世界中でデータ処理や保存の需要が高まっている。それに伴い、データセンターの建設が増加している。しかし、電気と水を大量に消費しながら、その土地の人々に直接豊かな生活をもたらすものでないこの眠らない大きな箱は、「NIMBY」としてゴミ処理場や火葬場と同じ列に並びつつある。

概要

敷地は横浜市都筑区の住宅街。データセンターは緑道公園を挟んで 100m 以内に存在する。人々の住処に場違い的に存在するデータセンターの排熱を利用し、住民憩いの場としてのたまり場を計画する。



広場を抱く 5 棟の屋根

丸みを帯びながら連なる 5 つの屋根は、それぞれ地面からの高さや日射の受け方が異なり、室内に入る光にも違いが生まれる。
中でも銭湯側の 1 棟 (右図赤色部) は、軒を深く伸ばし屋根勾配を 4 寸程度とすることで、夏は日射を遮り、冬は取り込む設計とした。光環境解析の結果より、室内の照度は夏に 500 ルクス程度と窓際でも過剰になりにくく、冬には 5000 ルクス程度まで日射が入り、暖房負荷の軽減が見込まれる。
また、計画敷地は周囲が開けており日射を得やすいことから、5 棟すべての屋根に太陽光パネルを載せる。屋根は棟ごとに高さが異なるため、パネルは隣り合う棟の影がかからない位置に割り付けた。発電した電力は、銭湯やカフェの照明や冷暖房に利用する。
さらに、データセンターの排熱を床暖房や給湯の熱源として活用する。自然の光と人工の熱が、室内の快適さを穏やかに整えていく。



銭湯から空を見上げる
—スマートフォンを置いて空に身を預ける—



緑道を抜けて銭湯へ
—木々に囲まれた小道を通り銭湯へ入る—



住宅街から広場へ向かう
—連なる軒先に導かれ、開けた空の下へ—

世代が見守り合う広場

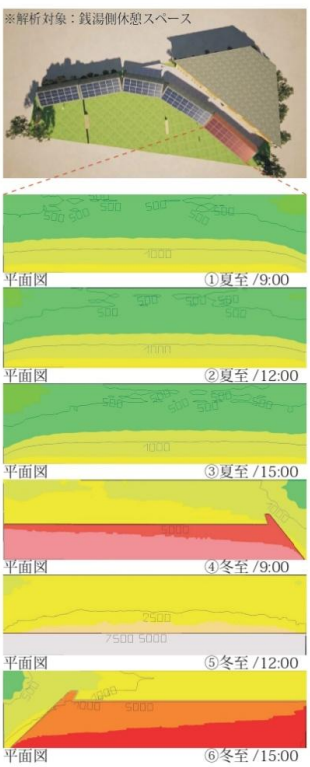
5 棟には、銭湯側から、休憩スペース (2 棟)、学童スペース、図書館、コワーキングスペースを配置した。
銭湯に近い棟ほどくつろぎの場となり、離れるにつれて学びや仕事の場へと、ゆるやかに性格が移り変わっていく。計画地付近は小学校もあり、放課後の子どもたちが過ごす学童、本を介して世代が交わる図書館、在宅ワークの人々が集うコワーキングスペースを設けることで、地域の暮らしのニーズに応える。すべての棟が広場に面しているため、休憩スペースでくつろぐ高齢者が広場で遊ぶ子どもたちを見守り、仕事の合間に親が子どもの様子をうかがうことができる。また、銭湯の下階にはカフェを設け、昼夜を問わず人が立ち寄れるたまり場とした。子育て世帯も高齢世帯も、ここを日々の拠点として安心して暮らせる場所を目指す。



information

address：神奈川県横浜市都筑区

- 近くにデータセンター（青印）
- 土地の周辺は比較的低層の戸建てが多く住宅街の中に存在する
- 北から南へ登りの傾斜がある



作品番号：27

風あい
～潮風と時間で育む居場所～

神戸大学大学院　工学研究科　建築学専攻　修士 1 年
青野倫奈
岡本幹大
田中愛梨

自然は絶えず変化し続ける一方、現代建築はその変化を抑え、完成時の姿を維持しようとする傾向がある。そこで、自然の変化によって形成された串本町を敷地とし、銅板の緑青化や苔の成長、風や匂いなど、異なる時間スケールの自然現象を受け入れることで、人と自然がともに時間を重ねるシェアリングスポットを提案する。

風あい　- 潮風と時間で育む居場所 -



Site　和歌山県串本町

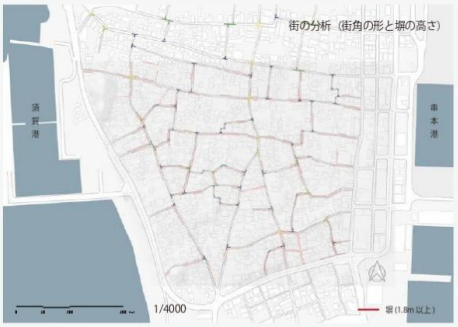
敷地は、和歌山県串本町の密集市街地である。
串本町は、砂州の堆積によって形成された土地の上に成立しており、町そのものが自然の変化の積み重ねによって生まれている。
一方で、市街地は細く複雑に入り組んだ街区で構成され、高い塀や建物の密集によって、風は街区の外周に留まり、中心部まで届きにくい。
自然の作用によって生まれた町でありながら、その内部は潮風から切り離されつつある。

Large Long ⟷ Scale ⟷ Small Short


自生する苔


金属屋根や壁のサビ


五感で感じる風



Program

提案するのは、潮風を街区内部へ導き、自然の変化を受け止めるための
分散型の居場所である。
各拠点は、街路形態に応じて塀や建築と一体的に計画され、
風を感じながら立ち止まり、過ごすことのできる半屋外空間や小さな滞留空間をつくる。
また、その中心には、人が日常的に集まり、休み、交流できる拠点を設ける。
風とともに変化する空間の中で、人と自然の新たな関係を育むことを目指す。



Design

本提案では、街区を 5 つのパターンに分類し、それぞれの形態に応じて、風を街区中心部まで導く空間操作を行う。
塀・植栽・建築を用いて、風を受け、導き、濾しながら、街区の奥へ自然の変化を届ける。

風の街への誘い込み　街角の分類　—5 タイプ—



風は、湿度や塩分を運び、銅板の緑青化や苔の生育など、時間の中で現れる変化をもたらす。
銅板の変色や苔の生育を取り入れることで、目に見えない風の作用を可視化し、時間とともに育つ街並みをつくる。

風による変化の利用

塩分による変化


自生する苔

水分による変化


サビ

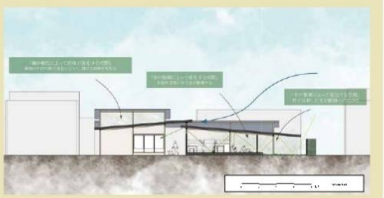
くの字路

地域の高齢者が、苔に包まれた薄暗く落ち着いた空間で、
酒をとりながらうたた寝をしたり、お茶を飲みながら世間話をしたりして、
ゆっくりと時間を過ごす、かつての老人憩いの家の新しい形である。
苔の色や厚みが移ろう様子が、そこに集う人々の時間の積み重ねと重なり合う。


銅が光を反射し、また時間や天候によって表情を変え、明るくにぎやかな気配をつくりだす



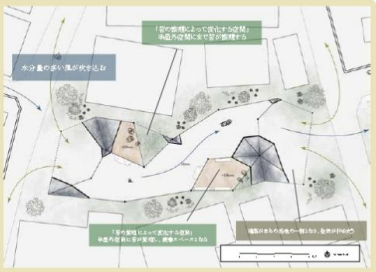

苔が光を吸収し湿度を保ち、静かで落ち着いた気配をつくりだす



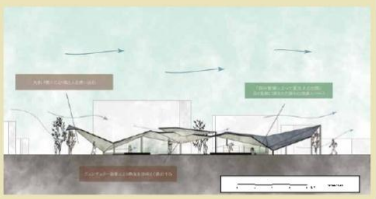
T字路

地域住民が日常的に、読書や勉強のために一人で静かに過ごしたり、
囲碁や将棋を囲み、2人と語らったりする。
また、読まなくなった本や使わなくなった道具を持ち寄り、
誰かがそれを手に取っていく、ひとつのシェアリングスポットである。

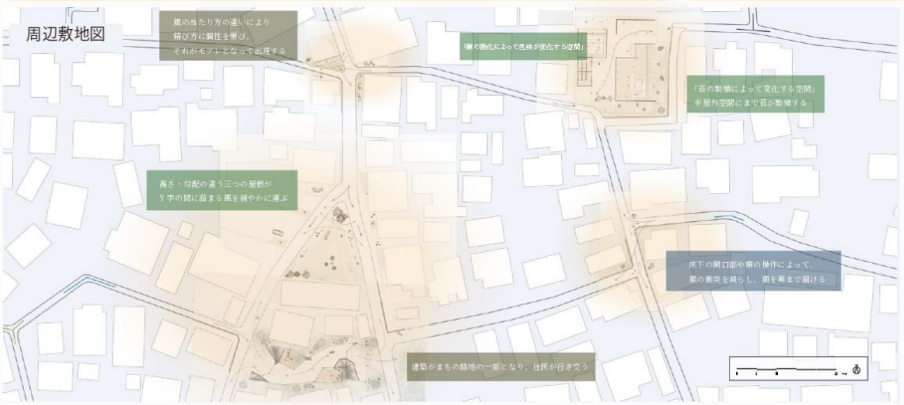

風と人を開いた屋根が迎え入れる




苔の空間と本のための空間が屋根によってゆるやかに分節されている



周辺敷地図




Y字路


十字路


乙の字路

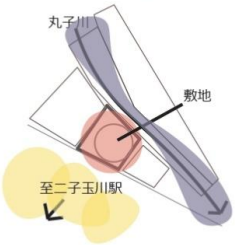
作品番号：28

暗闇を覗く
-うち/内/家から広がる宇宙-

東京理科大学 工学部 建築学科 3 年

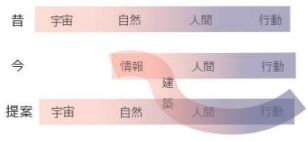
南に道路、北には丸子川。東西には家が並び、朝夕の低い光を遮る。一方で夜の街は光に満ち、暗くならなければ咲かないアサガオはつぼみを閉ざしたままだ。光は遮られ、夜は明るすぎる。この敷地は、光にも暗さにも恵まれていないようである。ではこの場所で光と暗さを取り戻すことはできるのか。建築を挟み上下それぞれにおいて宇宙・自然との交流を誘発することで、3 つの時間軸の変化を”待ち”ながら送る夏の住まいを提案する。

01 まぶしい都市の中で



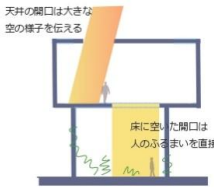
東京は光に溢れている。南に街路、北に丸子川が流れるこの敷地も例外ではない。一方で東西には２階建ての家が並び、朝夕の低い光を遮っている。夜の街は光で満たされ、暗くならなければ咲かないアサガオに必要な暗さが足りない。光は遮られ夜は明るすぎる。この敷地は光にも暗さにも恵まれていないように見える。この場所で光と暗さを取り戻すことはできるのか。

02 予測ではなく待つ暮らしを



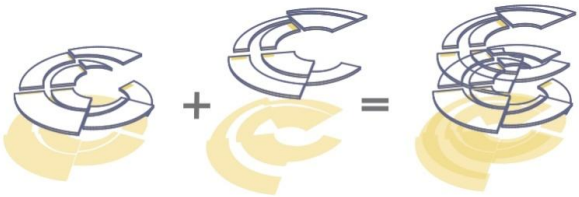
本来人は宇宙と自然を介した情報を観察することで、生きるための行動を起こしていた。しかし現代都市部では天気予報を始めとした情報技術が発展したことで自然を予測し、スマートフォンを見て行動することが当たり前になってきた。昨今の分厚い壁を有する建築も自然の情報を遮るという意味では情報技術と同義である。
本提案では開花まで暗闇の中で待ち続けるアサガオを用いることで３種類の時間の流れを同時に存在させ、建築を自然の変化を”待つ”空間へと捉え直す。

03 建築を大気層に組み込む



建築を高床にする事で、地上のアサガオと天空の月や太陽に挟まれたフィルターへと変容する。屋根の開口は天空を受け取り、床の開口は人の暮らしを地上へ手渡す。蔓は地面から屋根まで這い、上下の自然と建築を一続きにつなぐ。人はここで、自然を受け取ることも、自然に与えることもできる。

04 ライトスケープ

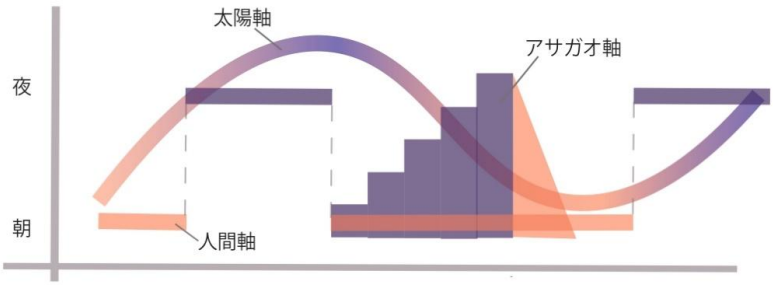


床と天井にそれぞれ異なる開口を設ける。床の開口は地面と最も離れる最上階を最大幅とする。一方で天井の開口は光の入りにくい下層階を最大幅とする。これが重なることで一日の中に様々な光環境が現れる。

-うち/内/家 暗闇 から広がる宇宙- 見えない



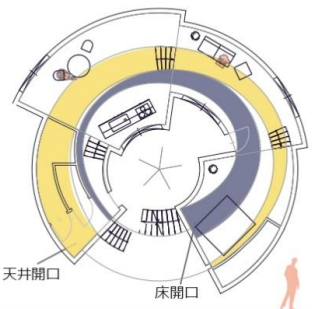




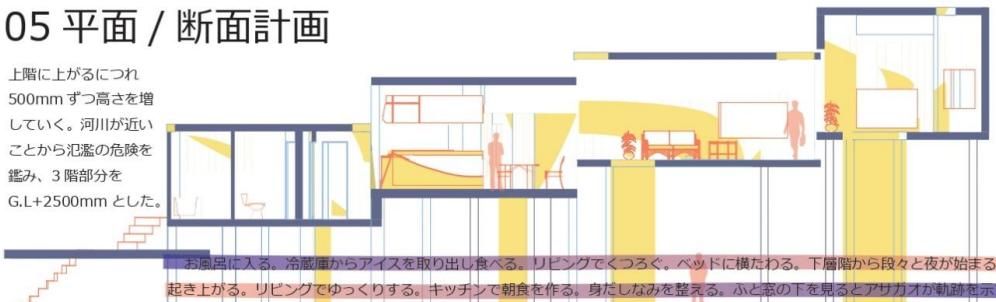
05 時間を受け取り、手渡す

月の示す夜は滑らかで曲線的な絶対力を持つ。
人の暮らしに灯る夜は照明により明確に切り替わる。
アサガオの夜はそんな人の夜を受けて積み重なる。
この３つの時間軸のズレを観察することで、この家に時間が生まれる。昼の長さは一年で最大 14 時間 35 分、最小 9 時間 45 分、その差は約 5 時間。アサガオの夜の半分でもある 5 時間を基準に、屋根の開口は朝は寝室と、昼はリビング、夕方はキッチンへと光を導き、時計でなく光の巡りで一日を測る。

05 平面 / 断面計画



上階に上がるにつれ 500mm ずつ高さを増していく。河川が近いことから氾濫の危険を鑑み、３階部分を G.L+2500mm とした。



お風呂に入る。冷蔵庫からアイスを取り出し食べる。リビングでくつろぐ。ベッドに横たわる。下層階から段々と夜が始まる。
起き上がる。リビングでゆっくりする。キッチンで朝食を作る。身だしなみを整える。ふと窓の下を見るとアサガオが軌跡を示す。

作品番号：30

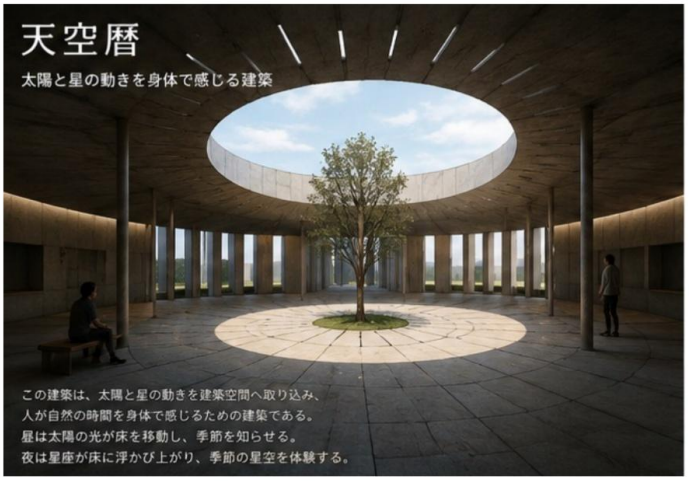
天空暦
太陽と星の動きを身体で感じる

国士館大学 理工学部 理工学科 3 年
保本　野乃葉

太陽と星の動きを建築空間に取り込み、自然そのものを「暦」として感じる建築を提案するものである。建物は中央に空へ開かれた天空広場を設け、その周囲を回廊が囲む構成とする。昼は屋根のスリットから差し込む太陽光が床を移動し、季節の変化を示す。夜は星空を見上げ、星座の移り変わりを体験する。利用者は建築を歩きながら、一日の時間や一年の季節、宇宙の動きを身体的に感じることができる。

天空暦

太陽と星の動きを身体で感じる建築



この建築は、太陽と星の動きを建築空間へ取り込み、
人が自然の時間を身体で感じるための建築である。
昼は太陽の光が床を移動し、季節を知らせる。
夜は星座が床に浮かび上がり、季節の星空を体験する。

空間体験の流れ



東から朝日が差し込み、一日の始まりを告げる。

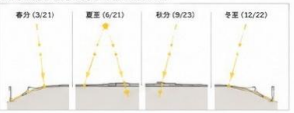
太陽の光が床を移動し、時間と季節を知らせる。

西に移る光が夕暮れを演出し、一日の終わりを感じる。

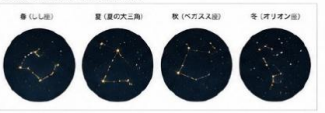
屋根の小さな開口から星が見え、星座が床に浮かび上がる。

中央の吹き抜けから天頂の空を見上げ、宇宙を感じる。

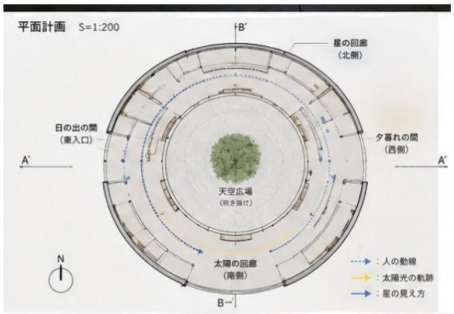
太陽の動きと光の軌跡（南側回廊の床）



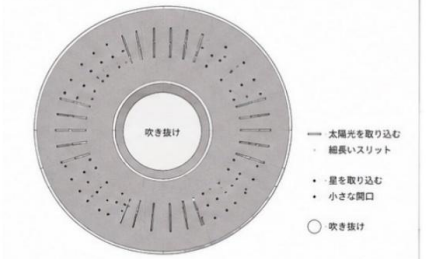
星座の移り変わり（北側回廊の床）



平面計画 S=1:200



屋根伏図 S=1:200



断面図 A-A' S=1:200（東西断面）



断面図 B-B' S=1:200（南北断面）



外観イメージ（昼）



外観イメージ（夜）



夜の回廊イメージ



素材イメージ



ディテールイメージ（光のスリット）

